

関山

かんざん

第11号



平泉の義経 安田靉彦画 山種美術館蔵

寺報 中尊寺

関
山

中尊寺〈寺報〉第十一号

平成十七年(二〇〇五)二月



〈発行 中尊寺〉

寺報 ぐらびあ

天上影はかわらねど―歴史に宿る光と影

貫首

千田 孝信

古寺巡礼と中尊寺

堤 勝雄

非日常の伝承

神居 文彰

〔余話〕

「鏡の松」二題

佐々木邦世

写経のころ―藤原氏三代の作善―

破石 澄元

〔提言〕

都市平泉研究から見た

菅野 成寛

〔グラビア解説〕

新指定の国宝「金色堂壇上諸仏」

福聚教会中尊寺支部西日本奉詠舞大会に招待出演

風信／語録

研究／出版

関山句囊・関山歌籠

北嶺 澄照

「国宝中尊寺展」報告

陸奥教区宗務所報 第二部 中尊寺関係

執務日誌抄

遠藤梧逸「大文字」句碑を再建

御奉納者御芳名

浄財御奉納者御芳名

不動尊篤信御奉納者御芳名

〈表紙解説〉

平泉の義経

安田鞞彦画 昭和四十年（一九六五）作
〈縦一〇四・二cm 横七六・六cm〉山種美術館蔵

鞍馬寺に預けられた牛若丸は、後に同寺を脱出、元服し源義経と改め、承安四年（一一七四）頃に平泉へ下向し、秀衡公の庇護を蒙っていた。兄頼朝が治承四年（一一八〇）に拳兵するや馳せ参じ、黄瀬川で劇的な対面となる。

みちのくの地で成長した義経公が凛々しく描かれ、その後ろには入道姿の秀衡公が静かに座している。

秀衡公八百年御遠忌特別大祭の時以来、十九年ぶりに平泉でこの絵をご覧いただく機会を得た。ご所蔵の山種美術館のご好意により十月一日から二十八日まで讃衡蔵で展示されることをごほど決まった。

〈表紙〉
平泉の義経 安田鞞彦画 山種美術館蔵
〈扉〉
国宝 金色堂壇上諸仏

〈お知らせ〉

◆中尊寺貫首土日説法

義経公の命日（四月三十日）から清衡公の父経清公の命日（九月十七日）まで、毎週土日午後二時より中尊寺本堂において貫首の法話が行われます。

- ◆ハスののち くのちの不思議
- ◆判官ひさき
- ◆ほこつても夫婦 ほつこけ夫婦
- ◆頑張らない生き方のすすめ
- ◆たまには 他人の幸福も
- お祈りしなさい
- など
- ご参加いただけます。

讃衡蔵テーマ展「平泉と義経」十一月三十日まで開催中

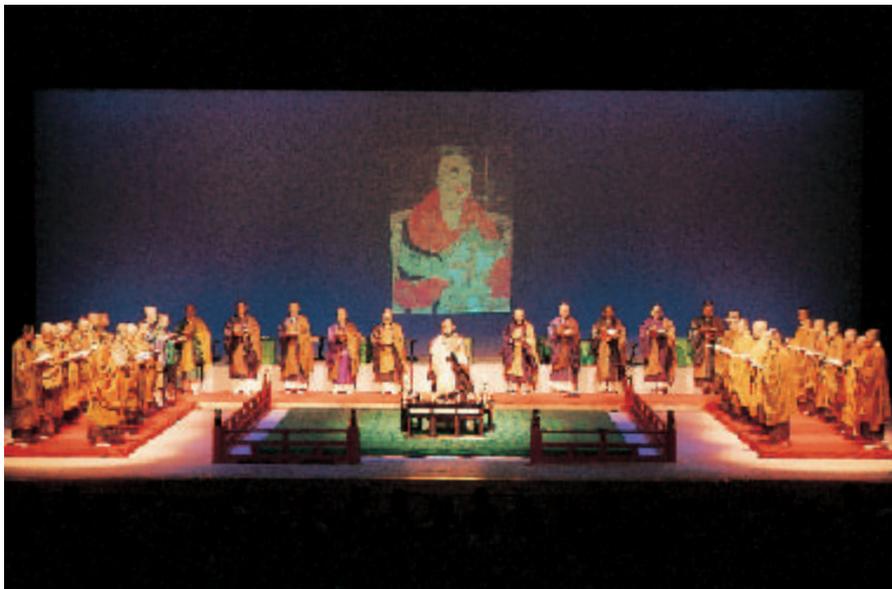
「源義経公東下り絵巻」はじめ、義経ゆかりの寺宝を中心としての展示。表紙を飾った安田鞞彦画伯の「平泉の義経」は十月一日から二十八日まで特別展示されます。



金色壇上諸仏 (記事45ページ)



「国宝 中尊寺展」(平成16年10月8日)
滋賀県守山市の佐川美術館で開催。写真は開眼法要。(60ページ)



声明公演「聖なる空間」(9月5日)
一関文化センターで開催。貫首はじめ一山より9名が出仕した。



中尊寺法華説相図從地涌出品
(4月25日、入江正巳画伯より奉納)



幻想中尊寺曼荼羅
(4月25日、入江正巳画伯より奉納)



螺鈿般若心經
(6月21日、全龍福氏より奉納)



松野奏風師の彩管になる「能舞台松羽目」
(記事は23ページ)



金銀装舎利壇(重要文化財)保存修理成る

中尊寺薪能 (8月14日)



狂言「簸屑」野村万作師・萬斎師



半能「須磨源氏」佐々木宗生師



能「夜討曾我」佐々木多門師



法泉院小前沢坊庫裡(岩手県指定有形文化財)
茅屋根修理を実施
平成16年度県費補助、(財)文化財保護・芸術研究助成財団からの助成も得て実施。



文化庁長官 河合隼雄氏来山(6月1日)
前日には町内で講演会が開かれ、貫首との対談も。



貫首、船村徹氏との対談(11月27日)
天台宗一隅を照らす運動岩手地区大会が開催された。



中尊寺菊まつり

新たに文部科学大臣奨励賞が設けられた。



衣川村衣里小学校 川西大念佛剣舞子ども同好会(8月24日)

小学生たちが例年中尊寺施餓鬼会に剣舞を奉納。同好会の活動も10周年を迎え、民俗芸能の伝承・保存活動が認められ、衣里小が岩手県文化財愛護協会表彰、同小PTAが文部科学大臣表彰を受けた。

中尊寺ハスの株分け



石徹白で開花した中尊寺ハス

4月9日、中尊寺とご縁のある岐阜県郡上市白鳥町内の二ヶ所に中尊寺ハスが株分けされた。

石徹白の地には秀衡公寄進の虚空蔵菩薩が奉安されている。石徹白大師講のみなさんに大切に育てられハスはみごと開花。

長滝の白山長滝寺・長滝白山神社に株分けされたハスも7月12日に開花。当地にはかつて秀衡公寄進の梵鐘があったが、明治32年に焼失したと。



長滝に開花した中尊寺ハス



一昨年株分けされた日光市の観音寺、二年目で開花した。



中尊寺蓮

草庵 蘭 冥中

金色堂榮えしより八百年

金色堂 榮えしより八百年

辛酸痛哭醒長眠

辛酸 痛哭 長眠の醒

泰公供實蘇魂魄

泰公の供えの実 魂魄 蘇えり

開悟恩讎常寂蓮

恩讎を開悟し常寂の蓮

七絶仄起 下平声一先韻

辛酸痛哭一三代の榮華も四代目泰衡を以て終り
供実一泰衡のさらし首をひそかに持ち帰った中尊寺一山の僧はせめてもの

供物として蓮の実を十数個首棺に入れたのが近年の学術調査
で発見。埼玉大の研究で発芽、開花に成功。中尊蓮と命名。当山にも
昨年根分、本年開花。長年の眠より今は恩讎を開悟。諸仏、諸尊
の供花として功德も清々となった。

常一常住不滅
寂一寂靜開悟の境地

中尊寺蓮

草庵 蘭実中

金色堂榮えしより八百年

金色堂 榮えしより八百年

辛酸痛哭醒長眠

辛酸 痛哭 長眠の醒

泰公供實蘇魂魄

泰公の供えの実 魂魄 蘇えり

開悟恩讎常寂蓮

恩讎を開悟し常寂の蓮

七絶仄起 下平声一先韻

辛酸痛哭一三代榮華も四代目泰衡を以て終り

供実一泰衡のさらし首をひそかに持ち帰った中尊寺一

山の僧はせめてもの供物として蓮の実を十数個

首棺に入れたのが近年の学術調査で発見。大学

の研究室で発芽、開花に成功。中尊寺蓮と命名。

当山にも昨年根分、本年開花。長年の眠より今

は恩讎を開悟。諸仏、諸尊の供花として功德を

つむこととなった。

常一常住不滅

寂一寂靜開悟の境地

群馬県下仁田の常住寺からも、昨年株分けした中尊寺
ハス開花の報せが蘭実中老僧から届いた。老僧自作の
漢詩が添えられてあったので、ここに紹介する。

(写真も老僧の撮影)



春の藤原まつり 能「鞍馬天狗」(5月5日)
山内の子弟6名が子方、稚児の役を立派に勤めた。



研修旅行、韓国へ

平成16年度の中尊寺研修旅行は、韓国へ。
世界遺産「石窟庵と仏国寺」「海印寺」「昌徳宮」などを訪ねた。

仏国寺の大雄殿前には釈迦塔（左手前）と多宝塔（右奥）が建つ。



海印寺には高麗版大蔵経が所蔵されている。



平泉中学校1年生、
本堂にて写経（8月22日）



能「枕慈童」

秋の藤原まつり（11月3日）



狂言「附子」
ぶす



東山町「若水送り」（平成17年元旦早朝）

元旦恒例の行事として定着した「若水送り」。
稚児によって汲まれた若水は凍く道を捧げ登り
今年も金色堂に供えられた。

天上影はかわらねど―歴史に宿る光と影

貫首 千田孝信

大河ドラマ「義経」が始まった。

史上わずか九年の足跡を残しただけの人物。それがその後何百年の間、物語で舞台上で銀幕で、無類の人気者として活躍し、いまや復讐が美德ではなくなった二十一世紀になっても衰えることがない。いったいどこに、義経の魅力があるのか。

どだい、日本人好みなのだ。智ではなく情の人。きつぷのよさが身上だ。率直で一本気で、疑うことを知らない。誉められれば喜んで受ける。脇が甘いから、騙されても気がつかない。正しくて、しかも世にいれられない宿命。誰しも胸に覚えがあらう。

外交の駆け引きとか、手練手管の智恵は、権力の頂点に立つオエライ方の仕事。最前線に曝す身は、将棋の駒の「歩」になりきる覚悟さえあればいい。喧嘩に強くなくっちゃ男じゃないよ。一ノ谷、屋島、胸のすくような勝ちっぷり、まるで神業だ。戦さが終われば、敗者にも気を配る情の深さ。まったく、泣かせてくれるよ。

女にモテなきや男しやないよ。惚れた女も、惚れがいのある女だった。たかが白拍子とあなどるな
かれ、静御前は、天下びと頼朝の前でも懼れず屈せず、堂々と歌いかつ舞った。「みよしのの峯の白
雪踏みわけて入りにし人のあとぞ恋しき」。義経もって瞑すべしだ。

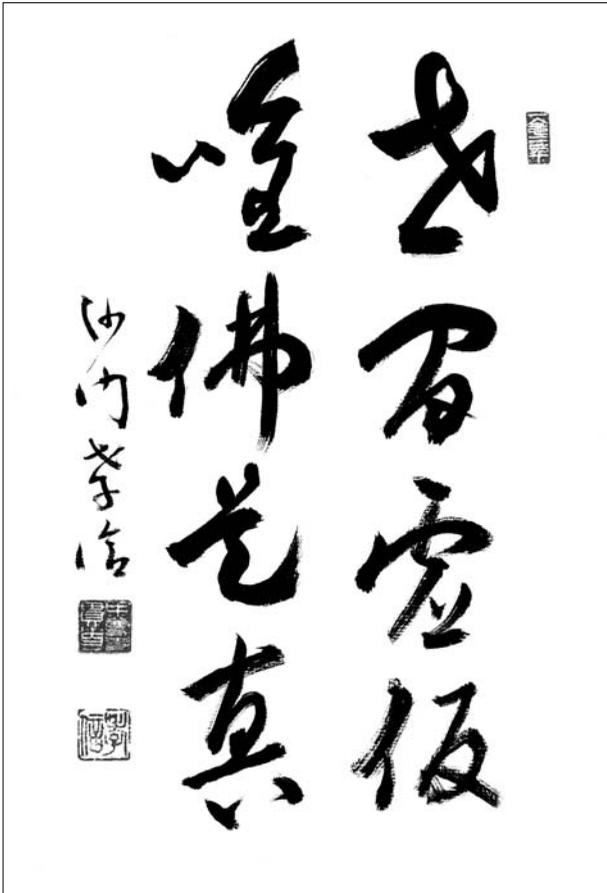
ワキは、諸国一見の旅僧、俳聖芭蕉。扶桑第一のワキ役だ。平泉を目指し高館に登って「笠打敷き
て時の移るまで泪を落し侍」った。この条りは「奥の細道」最高の見せ場、一にも二にも、われらが
シテ役義経を弔う詩魂の結晶、一幕の能舞台さながらではないか。義経主従、またもって瞑すべきで
あろう。

数多い義経北行伝説は、東北の民衆がシテに寄せたロマン、切々の郷愁だ。東北は、情深きがゆえ
か、戊辰戦争でも再び賊軍の汚名を受け、果ては負け組となり終わった。僻遠の地にいると、激動す
る天下の大局は見えてこない。しかし、この世には、体制よりも大切なものがあるのだ。

置きどころなき身を最後に托した平泉だったが、秀衡亡きのちは、あわれこの地にも「居場所」が
なくなつた。体制が見えすぎて動いた四代さんへの世間の目は、当然に厳しかった。しかし、その泰
衡にハスを手向けた名もなき仁、おそらく女性がいた。平成十年の夏、そのハスの実から発芽した一
輪の花が八百年の眠りから覚めて燦然と開花した。この薄紅色の美しい花影は、泰衡の成仏の、声な
き証ではなかったか。無念の思いでこの世を去った武将は、義経だけではなかったたのである。

正義はいつも、誰かを悪者にしてまかり通る。所詮、世間はいつも虚仮である。唯仏是真。人の世

の歴史に宿る光と影を、隔てなく抱きとるのは、唯ひとり、天上大悲の眼差しだけであろう。



古寺巡礼と中尊寺

堤 勝雄

鬼の土門、写真の鬼と呼ばれる写真家、土門拳に弟子入りしたのは、昭和三十八年の夏である。銀座からも歩いて十分の築地明石町の二軒長屋に住む土門邸の一日は、朝寝坊の土門拳を起こすことから始まる。台所の流しの湯沸器がわりの大鍋から湯を洗面器に張り、ジレット製両刃の剃刀を



温ため、歯刷牙毛にスモカの歯磨粉を延ばし、タオルを添えて、トイレから出るのを待って、二階の書斎兼寢室の布団をあげ、枕元の読みかけの本の頁を変えないようにそっと二月堂にあげ、叩きをかけ、掃き、拭き掃除を手速くすませる。二階に上ってきた剃りたて姿の仕上げに、着換えを手伝い一家そろっての朝食となる。撮影依頼、原稿依頼の電話を受け、撮影の許可依頼、スケジュール調整をし、チケットの手配、旅先の宿の予約、カメラ、レンズの手入れ、フィルムの調達など、すべてのマネージメント、助手、書生役を一手に任される。一日の終わりは、風呂屋の仕舞湯で背中を流し、冷たいミルクコーヒーを一気に流し込んで一日が終わる。

寒いところは厳冬に行き、夏の真盛りには南の熱気の中で撮影しなければならぬと日頃土門拳は固かな心情としている。それは寒いときは北国に行けば、北国らしい風情に出会うというような表面的なものではない。厳寒に北国を撮るのは相手に対してではなく、あくまでも自分の側の問題なのである。寒さに震えながらカメラを構えなく

ては、写真に血が通わないのだという。雪の金色堂、月見坂をぜひ撮影しなくてはと、上野発の夜行列車に飛び乗り、着いた深夜の平泉駅には列車の前にホームが無かった。無かったのではなく短くてたりなかったのである。慌てて太り肉の土門拳を抱き降ろし、大量の撮影機材を雪の線路に並べ、飛び降りねばならなかった。列車内で慣れた温まった体は一気に凍え、雪明かりの線路上に取り残された心細さは、一途な心情が、現実となつて胸を締めつける。夜明けを待つて新雪の月見坂を登り、金色堂に入ったときの冷え込みは、「網走番外地の独房でも、これほどではないだろう」と土門拳に言わせているが、受け身の助手には、数倍にもこたえる。撮影機材を組立て、そりろそりりと、金色堂に上り、床を這うようにカメラを構え、何度も何度もカメラポジションを替え、数センチ、数ミリのカメラアングルを確認する。高い精度のピントと、扶りたすとるような質感を得るため、ギリギリ最大の絞り値をセットする。長焦点レンズを得意とする撮影は少しの振動も失敗につながり根太のゆるんだ足元の動きにも最大の気を、

気を込めねばならない。気を抜くと手足は麻痺し、歯の根は合わなくなってくる。土門拳の撮影方法は、シャッターを開放して十数個のフラッシュ光を閃き込んでいく。右から左から、上から斜めから仏像のあらゆる面をフラッシュ光で浮き出させ、光を頭の中に組み立て、確認しながら、木炭で明暗をデッサンするように切り撮つてゆくのである。カメラを微動だにさせず、わずかに移動しながらフラッシュをもつ助手が土門拳の数センチの指示に従つて操つてゆくのである。一発、一発の閃光に浮かびあがる仏像を凝視し、一枚のフィルムに焼きつける作業は、ゆうに三十分はかかる。全身から撮りはじめ、半身、頭部、面相へと撮り終わるのは、深夜におよぶことは普通なのである。ガチガチと鳴る歯の音にも、動くなと怒鳴られ、気合いが止切れるからと昼食は抜くのである。腹立たしさも萎なえて禅宗の修行を思わせる。撮影に立ち会われた寺の方には、土門拳の仕事振りには、さぞや鬼を見たであろう。土門拳は、写真家を志したときから、日本の美、日本仏教の足跡を追いつづけ、日本人の証を検証し、記録することをラ

イフワークとした。全生活を賭した寺巡りは、歴史的な集大成となつて結実し、『古寺巡礼』全五



集として出版された。写真集の枠を越え、美術書の最高峰と認められ、菊池寛賞を受賞することにもなった。中尊寺で撮影された選り抜きの中尊寺ならではの華やかで確かな作品は、『古寺巡礼』第四集の巻頭に掲載され、その文中に「人はだれでも平泉に来れば歴史家になる。あえて金色堂ともかぎらず、路傍の小さな五輪塔にも、月見坂の杉木立にも、いや残るものとして何もない田圃の中の地名すら、人は人間のドラマを見せることができる。時間を一挙に空間に置きかえて人に見させ、人に感じさせるものが平泉にはある。」といわせている。近年、機会あるごとに中尊寺を拝観させていただき、あらためて中尊寺の魅力がどこにあるか、土門拳は、どこを見つめていたか、藤原三代の心をも見透かそうと必死にあがいていた土門拳を思い出し、同行できた幸せに、身が震え、微笑むのである。写真の師であるのは無論のこと、人生の大先達として、火を吹き、風を巻き起こしてかけ抜けた背中を見つめ思うとき、鬼の土門、仏の土門拳となつて、大きく姿を見せるのである。

(写真家・東京都在住)

非日常の伝承

神居 文彰

一

一体だれのはなしを聞いているのであろうか。現在、「世界遺産をどう考えるか」ということに対して、実に多くの立場から見解が寄せられ、私のもとにも答えの一端を探し求めてか多くの問い合わせがある。

「古都京都の文化財」(京都市・大津市・宇治市の十七社寺城郭)が世界遺産に登録されてすでに十年が経過する。

世界遺産登録にはクライテリア(登録基準)が設定されているが、世界遺産条約非締結国もあり、議長預かりの審議物件や復数年度審議を要した内容のものも多数存在する。登録地のアンバランスも指摘され、クライテリア自体年次によって改訂がある。

私のもとへのコメント依頼は、平等院が世界遺



庭園整備のようす

ている最中であり、バッファゾーンを含む周辺景觀には常に注意を払ってきたつもりである。私たちは開発行為自体を決して否定しない。むしろ、住環境の改善や在住者の多彩な交流の中に文化の新しい進展があると考えている。

だが世界遺産を見ているのだろうか。

日本では、世界遺産暫定リストに選定する際、

産に登録された直後、その後、その背後に高層マンションが建設されたからに他ならない。当時平等院では、国庫補助事業として、「史跡名勝平等院庭園保存整備事業」を実施し

遺産は「点」でなく「面」であるとして、該当物件が史跡や名称などの国指定の文化財に認定されている必要があったが、当初より平等院では物を中心とした区切られた（コアを中心とした）なかでの整備だけでは不足である旨を発言している。現在、平等院を拝観される多くの方々は、一様に背後のマンションに驚きを隠せないでいる。

さて、アスワンハイダム（エジプト）の建設によって国際的な協力援助を行う機構として世界遺産条約が一九七二年（昭和47）に生まれ、日本は一九九二年（平成4）に批准している。二〇〇四年（平成16）には我が国ではじめて文化的景観の遺産として、「紀伊山地の霊場と参詣道」が登録された。日本で世界遺産に推薦したもので認定されなかったものは皆無であるが、この意味するところと現状は如何であろうか。

指定のかげで二〇〇四年には、「危機にさらされている世界遺産リスト」に三件が追加され現在三十五件の物件が危険遺産に登録されるに至っている。

その中で、ドイツ連邦共和国の文化遺産「ケルン大聖堂」が「周辺の高層建築物による景観の統一性の破壊」ということにより、遺産自体のオーセンティシティの問題とは異なる内容でリストの記載が決定された。

平等院には、景観を含めた借景にその文化的ストーリーが存在することは周知のことであろう。二〇〇三年に開館した平等院ミュージアム「鳳翔館」（登録博物館府二千号）は、展示収蔵スペース等、殆どが地下施設である。これは平等院による景観に対するメッセージの一つと受け止めて頂いて結構である。

文化は誰にも分からない、理解されなくともその人々だけが知っている事実や美で構成されているわけではない。確かに分かりづらいとされる何かが存在する痕跡においても文化の胎動を感じる時もある。

おそらく、価値基準の共有もしくは理解と保持する志向が世界遺産には必要となろう。そこには、現在生きる我々の意志によってしか実効があり得



平等院鳳凰堂全景

ないが、視点は過去に遡る知行である。すなわち、現在生きる我々が、過ぎ去りし時から続くものに対して、いかに有機的に関わるかということに他ならない。

歴史は、事象ではなく連続である。

今さら世界遺産論ではないが、二〇〇一年四月に世界遺産登録暫定リストに追加登載された「平泉の文化遺産」の可能性を述べてみたい。

二

世界遺産候補と名乗り運動を展開するグループは今も増え続けている。日本はどこまで世界遺産を推薦し続ける国であり、どこまで責任を自覚しているかということが揶揄される場面もある。しかし、世界的な約束の中でこそ護持されなくてはならないものも現実には存在していると、文化に対する具体的方途が確実に芽吹いてきているように感じる。意識しない限り文化は確実に毀損^{きそん}していくのである。

「平泉の文化遺産」の世界遺産に取り組む姿勢

は目を見張るものがある。

『関山』十号にも転載されていたが、二〇〇二年十一月一日付けの『平泉町世界遺産推進協議会会報』に投稿されていた小学校六年生の少女の旅行記に、世界遺産にむけた大きな目標を持つ「その平泉町に住めていてとてもうれしい」ことが素直な気持ちとして述べられている。さらに、すでに世界遺産に登録されている奈良を歩いた時の感想の中で感じた、奈良に存在する世界遺産としての自信や誇りを、見事に自身の町の取り組みに昇華している。文化遺産の「文化」は人によって継続されるものであり、住空間がそのまま世界遺産の一部となる。すなわち、文化的人格を意識した都市(場)が世界遺産ということが出来るのではないだろうか。

文化と場は切り離すことが出来ない。その固有な文化に価値を認めるなら、そこに住する人々の、自律した感性による裏打ちが必要になるのである。世界遺産は、現実的には「観光」的側面を良くも悪くも高次に醸成する。世界遺産にはあきらか

に権威と効果を認めなくてはならないだろう。受け入れるためのハードの整備やソフトの展開。そこには居住する人々とは全く異質の文化を保持する人々が流入する。分ち分ちあう文化の融通が新しい美を育むこともある。それは、オーセンティシティを重視する世界遺産にとって有意義な皮肉かもしれない。

では、世界遺産の責任である保護とは何かという、遺産のもつストーリーの伝持と具体的伝持空間の保持へと言い換えることができるのではないだろうか。

投稿した少女は、きっと世界遺産運動以前から、この町が好きだったに違いない。山林や河川、建物や小径、そこに住む人々や会話。ストーリーをもつ、そこが彼女のふるさとである。ふるさとは、どれだけ離れていようとも、自身がどれほど変わろうともふるさととして存在する。

世界遺産のはじまりは、その場をふるさととする人々がそこを愛することに始まり、愛することにより、ふるさととなることにある。

三

空間を占める場というものには必ず表現される何かがあると同時に、単なる表現されたものに決して留まらない。

大学院時代、平泉の町を夜中レンタカーを借りて散策したことがある。柳之御所跡や無量光院跡などを結んで田圃の中を時々止まっては窓を開けて友人と空を眺めたものである。

平泉の文化遺産のホームページ (www.inpaku2.net/heritage/index.html) を開いて、登録への情熱と真摯な態度に好感を覚えたが、そのページの中に「飛地指定地（国指定史跡）」が整理されていることに興味を覚えた。それは、かつて車で走った路の目的地が多く写真とともに紹介されていたからだけではない。

この飛地を重視する姿勢こそ、追加登録の再評価に繋がる。

平泉全体の歴史性がこの飛地により強固に証明されるものばかりである。飛地は、現在でこそ離れた個別の遺跡であるが、かつては一つの文化圏の要素として有機的に連続した場なのである。

そして、世界遺産登録という視点で見ると、飛地は、飛地のあいだの在り方にこそ深い意味がある。

平等院のはなしをしよう。鳳凰堂は真東を向いている。すなわち、背中が真西である。その背後には太陽だけが沈み行く広大な空間がある。一九一九年（大正8）までそこに巨椋池という巨大な遊水池が広がっていたため、水気と水面反射で日没がとくに美しく茜色に輝いたそうである。日没は日想観に示される浄土や来迎の体現である。何も存在しないのではなく、日没という太陽の運行をも取り込んだ景観の設定である。

この場合の庭園は封じ込めた自然とも、飼いやらす自然とも異なる。

浄土というのは、いのちの先の存在の肯定、すなわち、日常とは異なる非日常の空間である。平安時代より平等院は「極楽いぶかしくば、宇治のみ寺をうやまへ」と童歌にうたわれている。いのちの先のいのちに疑いを持つたり信じられなくなった時、平等院を礼することで、もう一度信じ直

することができ、もう一度思い出すことが出来る、と言った意味であろう。浄土を思い出す仕掛けのかなめは、自然を取り込んだ場の取り扱いです。誰のいのちの問題かという、最終的には自身のいのちの問題に収斂することは言うまでもない。だからこそ、人々はここで礼したのである。

その非日常を、眼前に広がる自然を用いて再構築したのである。

しかし、現在では巨椋池は埋め立てられ、鉄道が敷設され田園と住宅地が続いている。

非日常への確信の設定が日常生活の場となっているのである。その場で生活する人々が非日常のストーリーを共有することができるかというところであるとは限らない。

京都で、借景を重視するのは、それが阻害された場合、こういったいのちに関係する部分において敏感に反応するのである。

ケルンの大聖堂の景観論議にも通じるが、非日常性を日常のなかで保存しなくてはならない点に、バッファゾーン指定の本義的な意味が内在し

ていると考える。

平泉の飛地指定地も、そのあいだの在り方にこそ、世界遺産の真価が問われるものと提議したい。

四

借景には、人が境界を越えるという深刻な恐怖を内在していると問題提起することが可能かもしれないが、それをいのちという非日常性を理解する空間認識とした場合、日常の境界認識とは異なる作用として何ら問題となることは起きえまい。その対照性の転換が自然を媒体として行われたものこそ借景といえるのではないだろうか。

神社仏閣を含む飛地から平泉全体を眺めるなら、平泉は単に藤原文化の再現を目指したのではなく、いのちの先の世界との交流を目指したものであると考えられる。

こういった内容は、平泉在住の人々同士や文化財所有者間の会話のなかでは通じるが、他所のものには理解出来ないという話ではない。文化財をどういう言語でしゃべっているかという、生

きている人間の営みの究極の問題の琴線に触れたところでの会話なのである。

非連続であるがゆえ、飛地指定地（国指定史跡）の一つにでも保存に間違いがあつてはならない。飛地には、濃密な生と死のストーリーが充分現在までも伝持され続けている。

さて、中尊寺参拝で最も印象に残っているのは、山内で上映されていたモノクロームの映画である。今でもあるのであろうか。ストーブの火が赤々と燃え、秀衡公らの御遺体調査の映像が流されていたと記憶する。ノスタルジックにこれを鑑賞した時、ここに来て良かったと感じたものである。金銅華鬘（国宝）を模った和紙華鬘もお土産グッズには最適であった。

普段見ることが出来なくとも、その存在によって尊ばれる秘仏も、開帳を楽しみに時間を待ったものである。今では、新讚衡威など新しい管理施設もある。これらは全て非日常の山内に生活する僧侶によって護持されている。日本の世界遺産の中でさらされている内面の生活の表徴といえなく

はないであろう。

これは、日常と非日常の生活者および環境において同一の文化を護る多面性が、世界遺産を護持するということにはかならない。

今後二〇〇四年五月、一部改正された文化財保護法に定義される「文化的景観」や同年十二月十七日施行した「景観法」、さらに「重要文化的景観」の選定など景観形成に関する関心は大きく変化するであろう。景観は共有財である。しかし、そこに関係するストーリーと現象は非常にプライベートな部分を有する。

是非、素晴らしい文化を伝持する平泉は、日常と非日常の調和と出会いによる創造を模索して欲しい。誰もが平泉の発言を欲している。一つの目的に対して、それぞれが具体的に対照的な対応を尊重しあう時、新しい世界遺産のシステムがきつと導き出されるに違いない。

世界遺産には、現在生きている我々が関わるのである。

「鏡ノ松」 二題

佐々木 邦 世

戦後六十年になるが、その前半期、貧困と荒廃、諸般に困難な世のなかで、歴史とか舞台芸術といったものを復興し、それに積極的に携わろうとする意欲が、東京にも地方人士のあいだにも思いついたように思われる。盛岡でも、当時いくらか宗家能が催行された。舞台は、盛岡劇場や県公会堂、そして後に県民会館において、いずれ特設舞台であり羽目板張の「鏡ノ松」であった。その鏡ノ松の話である。

昨年の暮れもおし詰ってからのことであるが、その松羽目図が、所有者の川徳デパートから、岩手県能楽連合協会（会長・遠山美知）を通して、岩手県文化振興事業団に寄託、岩手県立博物館に今後永く保管され、演能の折に活用されることになっ

た。

屏風には、松野奏風画伯の直筆裏書があつて、本画制作の経緯が知られる。この機会にここに紹介しておきたい。

附記 茲に描ける松は 中尊寺桜本

佐々木実高師庭上の老松を

参考とせり

昭和二十一年十月六日 岩手喜多會主催して喜多宗家六平太師を盛岡市に招聘の演能大會あり 此為に鏡板の用として此屏風を作らる會長川村氏の懇囑を承け 予老松之図を描く染筆に当り老梅苑西村氏館居正室を拝借し幸に秋晴の五好日を得て十月三日完成せり 岩手喜多會は戦後諸般事の不便を押しして催會し 而して此屏風は今後舞台の備品として永く此地に於ける演能の用に充てゝ以て斯道に貢献せんとするに意在り 予亦旨を體して欣懌執筆せしことを併識するもの也

時に苑中萩花蘭にして白風之を揺る庭に
対しつゝ 畫者 松野奏風

と読める。川村氏とあるのは、川徳デパートの川村英三氏で、岩手喜多会の会長として県下斯道の発展に尽力された。老梅苑西村氏とは、岡山県の人で当時盛岡に在任した西村信太郎氏である。

この松の羽目図は、昭和二十一年十月、十四世喜多六平太翁を招へいし喜多流宗家能を催行するに当たって、その舞台に備え能画家松野奏風師の彩管になる鏡ノ松である。

この地方の能愛好の方は、それが見慣れた中尊寺の野外舞台の松と同じ姿形であること一目瞭然、中尊寺の舞台で画かれ、それを更に写したものだろうと思ひ込んでおられる向きも少なくないようである。が、事実は逆なのである。

そして、この裏書きに識るされた川村氏と西村氏の御縁と御助成をいただいて中尊寺白山社能舞台の鏡ノ松が成ったということを聞知している人も、今や少ない。それにつけ、この松羽目が今回、県博の方に保存されることになったと聞いて安堵するとともに、関係者の識見に敬意を表したい。



〈昭和21年10月〉二列目中央十四世六平太師 前列中央 川村英三氏 右が松野奏風画伯

あの時／この舞台で

御宗家六平太翁と職分ご一行を中尊寺に迎え、「翁」付き五番立式能が催行されたのは昭和二十二年の秋でした。終戦直後のこと、しかも、演能予定の二十日前に平泉地方一帯がカスリン台風に襲われ、北上川の水位十六・八メートルにも達して堤防が各所で決壊し、しばらくは復旧の目途さえもつかなかったようです。

ご一行は一関の駅に降りたとき、まだ流され傾いたままの家屋を目にされています。が、地元能楽会員は、連日のように舞台見所の土盛り整地にかけておりました。「困難な時にそれを克服して演能の舞台を可能にすること、それが即ち能にも通ずる」という、会主実高の言をしっかりと受けとめられた方々も、半世紀以上経った今では、ほとんどが鬼籍に入られてしまった。

その折の、松野奏風先生の彩管になる鏡ノ松は当時小学生だった私も一役。なにせ食糧難の時代

でした。先生の昼食をこぼさないように舞台まで届けるのが私の大事な仕事でした。飯盒はんごうの中は、汁のすいとんでした。その鏡ノ松も、近年、大分退色してきまして、ご尊父の遺命を承けておられた秀世氏から、補色の話をいただいていた矢先の、氏の急逝です。

六平太師の「烏頭」、その至芸感想については瀧井孝著作『松島秋色』に活写されているとおりです。新作能「秀衡」初演のときでした。

実先生の舞囃子「西行桜」を拝見したのは、兄・宗生の「道成寺」披きのあった昭和五十七年九月でした。

「舞台の、古い杉の木目が足裏に感しられ、これもいいものだ」と仰せられたとか、後でうかがいました。

こうして、度々の宗家能、数々の至芸が披演されてきた中尊寺の野外能舞台であり、そして今夏、中尊寺薪能は第二十九回を数える。

〈十四世六平太記念財団広報第9号〉

（執事長）

写経のこころ

——藤原氏三代の作善——

破石 澄元

写経が静かなブームとなっている。中尊寺においては、バブル崩壊後しばらく経ってからの、平成九年、故植村和堂先生が紺紙金字法華経一部を金色堂に奉納なされてから、特に多くなっているように思われる。今日中尊寺には全国の善男善女から般若心経が写経奉納されている。般若心経に限らず、毎月本堂で法華経の写経をしているご婦人グループも熱心である。まさに漸写経というべきであろう、一度のお参りで三〜六紙写経し、開結そろえて一部十卷完成するのに五年はかかる。特に急ぐこともなく、しかしながらたゆまない作善の姿に頭が下がる。また、毎年六月に行っている法華経頓写経会には、近在の人を中心に百人を超える善男善女がこの本堂に集い、一日で法華経開結とも一部十巻を書写している。これも、一日に二部書写するこ

ともあったりして盛況である。

初代清衡公の写経

中尊寺と写経は、言うまでもなくとりわけて緊密な関係にある。藤原氏三代打ち続いて写経作善に取り組んだためであり、それらは概ね中尊寺に納められていたと思われる。

奈良朝のころ、全国に国分寺・国分尼寺が建てられた。

国分寺は仁王護国の寺として紫紙金字の金光明最勝王経十巻が納められ、また国分尼寺には滅罪生善の寺としてやはり紫紙金字の法華経八巻が納められた。平安の末期、初代清衡は鎮護国家の寺として中尊寺を建立し、その法として有名な紺紙金銀字交書一切経五千三百余巻を供養した。白河法皇の金字一切経供養や神護寺経・荒川経など、金字経の例はその頃のものとしていくつか見られるが、金銀交書の形態は一切経としては稀有のものであった。金銀字交書一切経の書写事業の奉行には大長寿院初代の蓮光があたり、八カ年を費やして見事に完成させた。その功績により、蓮光は私領骨寺領を経蔵別当職の所領として安堵されたのである。

八カ年で一切経五千三百巻を書写するのに、どれだけの人員を費やしたかということについて考えてみたい。まず五千三百巻を八年で割ると、一年に六百七十巻ということになる。近世初頭に持ち出され、今日高野山金剛峯寺に納められている六十華嚴経卷第十の奥書によると、僧永昭は二カ月で十巻を書写したとある。とするとこの人は一年間に六十巻は書けるわけで、単純に計算すると総勢十二人もいればこの書写は可能ということになる。これはあくまで計算上の人数であるが、推測するに多くても二十人の写経僧がいれば十分可能だったのでなかろうか。その他に表紙絵・見返し絵を担当した絵師や、誤字・脱字をチェックする校生、料紙や軸・巻緒などを整える装潢^{そうこう}、文字を磨きだす螢生などもいたと考えると、この写経事業にはさらに十〜二十人くらいが携わったのではないだろうか。ちなみに、写経僧の賃金を想像してみると、時代は違うが、正倉院文書で奈良時代の写経生の賃金を、米代を基準として現在の金額に換算した例があって、それによれば金字の写経生の賃金は一日当たり現在の金額で二千二百四十円くらい

の計算になるようだ。もちろん金銀字ということで、割り増しはあったと思われるが……。

料紙に使われた紺紙について、楮紙であるが比較的濃い紺色に染め上がっており、漉き染めにしたものに違いないと言われたこともあったが、これは明らかに漬け染めである。漉き染めとはまだ紙になる前の状態、紙漉きをする前、つまり繊維の段階で染めることで、これに対し漬け染めとは、紙をそのまま染めることを言う。これも高野山金剛峯寺所蔵分の中尊寺経で見ると、赤外線調査の結果墨書や、墨印が明瞭に現れているのであり、到底漉き染めとは考えられず、漬け染めである。昨年の暮れにある装潢師さんのお宅を訪問したときに、それぞれの染め方をした紙を見せていただいた。当然漉き染めの方が濃い色になると思っていたが、まったく逆で漬け染めの方がはるかに濃く仕上がっていた。年末のことで十分ご教示いただけなかったが、あらためて訪問したいと思っている。

表紙絵に宝相華唐草文様が描かれていることや、軸端に

金銅撥型に四弁花文様が毛彫りされていること、また巻緒に草木染の紐が使われているのは、当時通用されていたものである。しかし見返し絵については、やはり特筆に値する。釈迦說法図を中心に描いているが、神護寺経や荒川経では、概ね靈鷲山を背にした釈迦が中央の蓮台に坐し、二菩薩・二比丘が兩脇に控える絵柄に終始している。しかしながら、中尊寺経ではやはり釈迦說法図を中心としているが、その図様は多岐にわたり、ほかにも経意を表すもの、風物をあらわすもの。登場する人物も官人から善男善女、童子や童女。あるいは動物、楽器など多彩である。金銀字一切経は、金銀交書の形態が特筆されるが、この見返し絵も極めて特徴的であり、絵画資料としても興味深い。

金銀交書の形態をとったことについて、先例として尾道浄土寺や延暦寺に法華経を伝えており、また一切経の金銀字経としては慈覚大師円仁が見聞した五台山経藏閣の「紺碧紙金銀字大藏経六千卷」の記録があり、これらに倣ったものと考えられている。あるいは、白河法皇の金字一切経に対し、一步控えた形として金銀にしたものとの考え方も

あるようだ。清衡の中尊寺建立にあたっては、比叡山の影響が多くあったと思われる。その比叡山は天台法華円宗として、法華経を根本經典とし、その法華経が金銀字交書経の形で納められている。清衡はこの比叡山の例に倣って、金銀字交書一切経を供養したものであろう。

ところでこの金銀について、なぜ金字と銀字にしたのか。紺紙金字経の場合、銀泥は表紙見返し絵にはしばしば使用される。また界線も銀泥で引かれるのが一般的である。あえて金字と銀字を交行にしたのは、単に写経莊嚴を意味しただけでは無いように思われる。「中尊寺建立供養願文」に、『金書と銀字一行を挟んで光を交わし』とあり、同じく『金銀和光し、弟子の中誠を照らす』とある。前後には『毛羽鱗介の屠を受くるもの、過現無量なり』などの文言もあり、この対比する金銀は一切衆生を象徴的に意味しているように思えるのである。すべての存在を尊重し、それぞれの光が交わり、調和することによって平和な社会が築かれるのである。「中尊寺建立供養願文」は平和主義の宣言であった。

清衡の写経は、自ら戦争に明け暮れた前半生を顧みて、その中に失われた多くの尊い生命に思いをいたし、荒廃した奥羽の地を、日本全土の安寧を希求した強い決意だったのである。

二代基衡公の写経

基衡の写経は紺紙金字法華経に終始したものとされる。これは亡父清衡追善供養の資としたもので、千部一日経として名高い。これは亡者追善のために法華経一部十卷（開結とも）を、一日のうちに頓写・講説するもので、生涯のうちに千部に到達することを願ったものである。紺紙に金字で写経しており、他の金字経と装丁に大きな違いはない。中尊寺には現存しないが、他に残っている例を見ると、奥書に「千部一日経」の文字が見える。十二世紀、中央においては法華経書写が流行しており、追善経として書かれたと思われる遺品も、数多く残っている。

話はそれるが、法華経書写という意味においては、鳥羽院周辺によって結縁書写された久能寺経（国宝・静岡市鉄舟寺他藏）などはまさに基衡の時代のもので、法華経二十

八品に、開経と結経を備えた三十巻の一品経である。各巻それぞれに思い思いの華麗な装飾が施されている。装飾経の代表的な遺品のひとつに数えられるが、いかにも貴族の美意識が如実に現れた遺品といえる。久能寺経から二十年后、今度は武門平氏によって平家納経（国宝 広島県厳島神社藏）が供養された。平清盛が一門の繁栄を祈り発願し、長寛二年（一一六四）厳島神社に奉納した経巻で、『法華経』二十八品と『無量義経』『観普賢経』の開結、『阿弥陀経』『般若心経』、さらに『願文』を添えた三十三巻の一品経である。表紙・見返し・本文料紙・軸及び軸端など、ことごとく美の限りを尽くした、豪華絢爛たる装丁である。平清盛をはじめ重盛、頼盛ら一門三十二名の結縁になる。善美を尽くすということが篤信の表れと考えられ、久能寺経に勝るとも劣らない絢爛さである。それまでは貴族の仏事作善であったものが見事に武門平氏に受け継がれたのである。

ところで、基衡の追善経は当然金色堂の清衡霊前に捧げられてしかるべきと考えるのだが、中尊寺には明らかにこれとわかる遺品はない。かなり早い時期から中尊寺を離れ

ていたように考えられるが、あるいは当初から他の寺々に納められたものとは考えられないのだろうか。

さて、この千部一日経の書写事業は保延三(四年(一一三七)〇)ころから始められ、保元年間(一一五〇)の頃まで続けられたものと思う。大治三年(一一二八)および同四年(一一二九)の清衡追善の法華経があるが(金剛峯寺および日光輪王寺藏)、これは清衡の妻平氏の発願と考えられ、千部一日経には含まれない。現存するものから見ると、保延四年五月から同六年(一一四〇)五月までの二年間に百六十二部、それから八年後の久安四年(一一四八)八月までに三百四十八部という進捗状況であり、このときまでに都合五百七十二部が完成している。その後の同経巻が見当たらないので明確には言えないが、現実に千部が完成したのかどうか、きわめて微妙である。ちなみに千部の法華経となると、開結ともで一万巻におよび、数量的には一切経をはるかに凌ぐものである。

基衡の千部一日経は、自らの家督相続の争いなども考え合わせて、父祖への感謝の思いと、ひたすらに冥福を祈ろうとしたものであった。

三代秀衡公の写経

秀衡は先例に倣って、亡父基衡の追善写経をしていたようである。現存する金字法華経は百数十巻あり、その中に奥書に安元二年(一一八六)秀衡が亡父基衡追善と記したのもある。基衡の千部一日経ほどには追善経を書写していないが、金字一切経を発願書写している。これはおそらく無量光院建立供養としたものと考えるが、この写経をするのに南宋より宋版一切経を請来しているのである。それまでの写経は、その底本として転写本、つまり書き写したものを使っていたわけだが、その場合には誤謬なしとは言い切れない。そこで底本のほかに、校本を用意して校合を余儀なくされていたが、基本的に版経には誤字・脱字がないわけで、宋版経の請来は画期的なことであった。この宋版経は、開元寺版・等覺院版・思溪版の三版混合蔵である。開元寺版の成立は紹興二十一年(一一五二)のことであり、それが多くの人々の喜捨によって明州城下吉祥院に奉納されたものであり、そのほか中尊寺現存の華嚴経などを見ると、請来時期は西暦で一一八〇年頃のことと推測される。そして現存金字一切経には、宋版経の巻頭首題前に印刻さ

れている開版刊記がそのまま書写されているものもあり、底本としてこの版経が使われたことは明らかである。よって秀衡の金字一切経の成立は、早くて西暦で一八〇年頃のことと考えられる。ちなみに宋版経の守り本尊とされる騎師文殊菩薩像の制作年代もその頃でよさそうに報告されている。

この金字一切経も基本的に清衡の金銀字一切経に倣っており、やはり見返し絵の多様なことが特筆される。

秀衡の無量光院建立と金字一切経供養は、まさに慈愛撫育した義経が源平の合戦に馳せ参じたところであった。激動する世情の中、奥羽の安寧を祈念したものであったのかもしれない。

中尊寺に現存する金字経を見ると、上記に分類されない経巻が数多くあり、その成立年代、写経の発願者、願旨など、これから考察していかなければならない。

いま写経が静かなブームというが、藤原氏三代のころの写経とは大分趣きが違っている。有り難い経の文字を書写

して、その功德をいただこうとするようなことはまずない。修学旅行に来て、体験的に写経をやってみるというようなことは、ひとつは修養としてやってみるくらいの考えかも知れない。また、一心に書写していると心が落ち着くという人もいる。また、書の練習としても格好の教材と考える人もいるかもしれない。不思議に実際に写経をする人は、年齢を問わずまず女性がほとんどである。その女性に導かれて、あまり積極的でない男性も写経していることもしばしばである。願旨も、「世界平和祈願」「交通安全祈願」「家内安全祈願」、あるいは先祖や縁者の「追善供養」などさまざまである。どんな形でも自分なりに丁寧に書写すること、これが必要、かつ最も大切なことである。法華経「法師品」に説かれている、写経の大きな功德はその人について回るはずであるから。

(中尊寺仏教文化研究所主任)

〔提言〕

都市平泉研究から見た

平泉世界遺産化の問題点

菅野 成寛

はじめに

最近、テレビや新聞記事などを見ていると、平泉文化のユネスコ世界遺産化を期待する報道やPRをよく目にする。関係諸機関によれば、二〇〇八年における正式な世界文化遺産登録（二〇〇一年に暫定リストに登録）を指すという。古の先人達（いじよ）が培った平泉の文化遺産が国内だけでなく、国際的な評価を得ようとしていることは何よりも喜ばしいことである。

実はこうした気運の背景に、近年における平泉遺跡群の発掘調査を契機とした平泉文化研究の急速な進展があったことはどうも見過されがちである。平泉の文化遺産に対する学術的な評価なくして、世界遺産の暫定リストに登録さ

れることなどあり得ない。平泉と同様、二〇〇七年には石見銀山遺跡（島根県）が、そして二〇〇九年には鎌倉市（神奈川県）も世界遺産登録を目指すといい、その学術調査体制も整いつつあると聞く。ちなみに、二〇〇四年には「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコ世界遺産委員会の認定を受けたが、これも学術的评价がその基盤となっている。

世界遺産シンポの開催

右のような国内的な動向をうけてか二〇〇四年十一月、東京大学において公開シンポジウム「世界遺産と歴史学」（史学会主催）が開催されたことはまことにタイムリーであった。日本と中国と欧米の事例が紹介され、会場には立ち席も出るほどの盛況であった。とくに日本側の報告は、既に世界遺産化を果たした「紀伊山地の霊場と参詣道」のケースと、次にそれをねらう平泉の事例が紹介され、平泉については入間田宣夫氏（東北大学）が、そして紀伊山地については小山靖憲氏（帝塚山大学）が報告をされた。

最初の報告者である小山氏は、紀伊山地が世界遺産化を

実現できたポイントとして、①日本的な信仰(仏教・神道・道教・修験道など)が集中する場、②文化的景観としての参詣道(熊野参詣道・高野山参詣道)の存在、③和歌山・奈良・三重3県にまたがる広大な地域、の3点をアピールしたことを述べられ、なかでも②の「文化的景観」の考え方をとくに強調された。これは二〇〇四年度の文化財保護法に新たに導入された概念で、たとえば棚田や参詣道、あるいは吉野の桜などもこれにあてはまるといふ。つまり、熊野や高野山の参詣道がこれに該当したわけで、この「文化的景観」という考え方は、平泉文化の世界遺産化を推進するにあたって大いに参考となろう。

平泉世界遺産登録のコンセプト

次に問題の平泉について、入間田氏は「古都平泉の生活・文化遺産について」とのテーマで、次の9点のポイントを示された。やや長くなるが、参考のため原文のまま報告レジュメの内容を紹介する。

① 平泉は、奥州藤原氏四代の当主によって統治され、独

特の黄金文化に彩られた十二世紀・東北日本の中心都市である。古代から中世への移行期に形成された最初の本格的な地方都市である。風土に密着し仏教色に溢れた日本的な都市モデルの先駆けである。

② 奥州藤原氏は、京都の中央政府に黄金ほかの貢物を進上して、安全保障の代価を得るとともに、京都の優れた生活・文化の導入に努めた。それによって、京都風の生活・文化と在地風の生活・文化が融合した特色あるスタイルが生み出された。

③ 都市平泉は、北方世界(北海道・千島方面を含む)との交易、博多湊を経て中国大陸に繋がる交易、その北南両方の交易を媒介する中間点に位置した。奥州特産の黄金は、中国交易を支える戦略物資であった。都市平泉には、北南の交易品が山積され、北南の文化要素をブレンドした国際色あふれる生活・文化の姿がかたちづくられた。

④ 中尊寺「一基塔」には法華経が奉納され、同じく「多宝寺」には釈迦・多宝両如来の並座像が安置されて、奥州世界の中心、延いては三千世界(大宇宙)の中心を表示していた。

⑤ 中尊寺、毛越寺、観自在王院、無量光院、などの造営に際しては、京都の寺院モデルが発展的に導入された。それらの寺院建築に付属する庭園遺構には、京都のそれを超える傑出した価値が具えられ、日本の庭園文化史のハイライトをなしている。

⑥ 都市平泉の中心に位置する柳之御所遺跡には、東北日本全域を統治する政庁が設置されていた。その「平泉館」とよばれる政庁には、奥州藤原氏が居住して、統治の実務を取り仕切るとともに、盛大な儀式・宴会を繰り広げていた。遺跡の発掘・調査によって、大型の掘立柱建物跡や園池跡、銅製の印章、宴会に用いられた京都風の「かわらけ」（素焼土器）、中国渡来の白磁四耳壺、渥美・常滑産の壺甕類が検出されている。そのうえに、長大な空堀跡が検出されて、軍事的な備えにも、留意されていたことが知られる。

⑦ 中尊寺金色堂には、黄金文化を象徴する華麗な装飾が施され、藤原三代の遺体（ミイラ）が祀られていた。それらの遺体は、都市平泉の繁栄を見守る守護神として崇敬され、いまに至っている。東西南北の鎮守は、悪霊・疫病の

侵入から都市民を護り、西郊に聳える金鶏山には、多くの経塚が営まれ、来世への希望を、人びとに与えてくれた。

⑧ 縦横に走る大路、車宿（牛車の収納庫）の並び、林立する高屋群（高床式の倉庫群）など、都市インフラの遺構が検出されている。毛越寺延年など、都市生活を彩る祝祭の名残がいまに伝えられている。

⑨ 都市の生活・文化を支える周辺農村部においても、豊かな文化的景観が良好に維持されている。荘園遺跡や有力者の居館跡が検出され、多くの宗教施設が残されている。

右の9点は、近年の平泉文化研究の諸成果を分り易く盛り込んだもので、とくに①③⑥⑦⑧などはそうである。入間田氏は触れられなかったが、無量光院跡の宗教的景観などもこれに加えられるだろう。

さらに入間田氏は、こうも強調された。平泉の世界遺産化を推進するにあたっては、柳之御所遺跡などに代表される生活文化の遺産面をとくに重視、アピールし、寺院などについてはとりわけ強調するには及ばぬ旨を述べられた。

既に世界文化遺産に認定された奈良や京都に数多くの古代・中世寺院が存在するため、という。

確かに、右の⑥や⑨で紹介された柳之御所遺跡をはじめ、莊園遺跡や有力者の居館跡、さらに宗教施設として、平泉の世界遺産化をPRするパンフレット「平泉の文化遺産を世界遺産へ」（水沢・一関両地方振興局発行）の史跡マップには、柳之御所遺跡、骨寺莊園遺跡（二関市）、白鳥館遺跡（前沢町）、達谷窟（西光寺）、そして長者ヶ原廃寺跡（衣川村）などが写真入りで大きく紹介され（むろん、金色堂や毛越寺なども紹介されているが）、併せて「平泉の文化遺産」は、浄土庭園を特色とした文化的景観で世界文化遺産登録を目指します」とも明記されていた。これは寺院の存在を顧慮しないことと確かに符合している。

つまりそれは、生活文化遺産と庭園遺産とをコンセプトにして平泉の世界遺産登録を目指す、という主張、アピールである。ではこのコンセプトは、近年の平泉文化研究成果と平泉の文化財・史跡の在り方に照らして妥当か、果たしてヨーロッパ価値基準のユネスコ世界遺産委員会の認めるところとなるか、それが最大のポイントとなる。

世界遺産の理念と都市平泉研究

まず世界遺産とは、一九七二年のユネスコ総会で採択された「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」にもとづき、全世界の人々の共有財産として国際的に保護・保全していくことが義務づけられている「史跡」や「建造物」、「自然」などのことで、先に触れた「文化的景観」も後に登録対象に加えられている。

その理念は、商業主義的な観光目的のものではないことは明らかである。私は、平泉の世界遺産登録を最大の目的、到達点と評価するものではまったくない。世界遺産化を契機として、平泉が有する歴史的文化的環境が保護・保全され、平泉の文化性が国際的な場で議論されることを切に願うだけである。その意味で、平泉の世界遺産化は大いに賛成である。

そこで平泉研究だが、近年の研究は、平泉のいったい何を明らかにしてきたのであろうか。それは一言でいえば、『吾妻鏡』^{あづまかみ}にもとづく「都市平泉」像の具体的復元であった。先の入田氏の論点⑥⑦⑧などがそうで、これに平泉遺跡群発掘調査の成果が大きく寄与したことは言うまでも

ない。⑥がそうである。二〇〇四年に一応完成（まだ未
成部分を多く残している）した、C・G（コンピュータ・
グラフィックス）による「甦る都市平泉」の復元映像も大
きくその恩恵にあずかっている。

鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』こそ平泉研究の第一級史料
と評価できるわけだが、その文治五年（一一八九）九月十
七日記事が「都市平泉」復元の有力な武器となる。その要
点はこうだ。

中尊寺金色堂の正方の位置に平泉館が構えられ、さらに
この平泉館に接して無量光院が営まれており、また無量光
院の門前、正面方向には加羅御所が設けられていた。平泉
館も無量光院も加羅御所もすべて三代藤原秀衡が造営した
ものであった。

中尊寺は初代清衡が、毛越寺は二代基衡が建立したもの
で、また観自在王院は基衡の妻が建てたものであった。そ
の観自在王院に接して数十棟の高屋と車宿とが設けられ、
倉町街区も存在していた。

鎮守として平泉の中央には惣社が構えられ、しかも東西

南北の各方位すべてにおいて二社づつ鎮守社が祀られてい
た。

以上が『吾妻鏡』が記録する「都市平泉」像の概要だが、
ここでとくに重要な点は、冒頭部分の〈金色堂―平泉館―
無量光院―加羅御所〉という平泉独自の都市構造、聖なる
軸線が判明する点である。そのうち金色堂は初代清衡が一
二四年に創建した藤原氏歴代の墓堂、また平泉館ひらいずみのたちは三
代秀衡が統べる東北政府機関、さらに無量光院と加羅御所
はその秀衡が浄土往生を体感し、浄土世界を礼拝すべく設
けられたセット的空間であった。つまり『吾妻鏡』によれ
ば、藤原氏歴代が眠る金色堂を基点として平泉館と無量光
院と加羅御所という政治と宗教の場が設定されていたこと
になり、「都市平泉」における理念の原点、核こそ中尊寺
金色堂であったことが判明する。これは入間田氏の⑦にも
反映されており、私を含む近年の平泉研究者の多くの承認
するところとなっている。

惜しいことに、歴代の藤原氏が建立した堂塔伽藍の大半
は壊滅してしまっただが、奇跡的に金色堂だけは、ほぼ創建

時の姿で現存している。「都市平泉」における理念の原点は、幸いにもいまだに健在なのである。平泉文化の象徴でもあるその金色堂が、世界遺産化のコンセプトにおいて一顧だにされぬのは何とも不思議なことではあるまいか。

史跡調査の現況とその問題点

しかし、だからといって私は、浄土庭園遺産や柳之御所遺跡などの生活文化遺産の価値を軽視するつもりは毛頭ない。無量光院庭園景観が有する獨創性について最初に論じた研究者は私であったし、かつて平泉文化研究会の一員として、柳之御所遺跡の保存運動に進んで身を挺した経験ももつ。平泉史跡群の価値は十分認識しているつもりである。だが、たとえば柳之御所遺跡の場合、国内外からもたらされた無数の遺物が発見され、また多数の柱穴群を検出したにもかかわらず、肝心の建物の復元すらおぼつかぬのである。最近これを三代秀衡の平泉館と見なし、建物復元を試みようとしていると聞くが、現在のところそれは不可能と言うほかない。私も制作委員の一人として映像化に携わったC・G「甦る都市平泉」において検討した結果である。

それゆえ、C・Gにおいては建物復元の試みはなされていない（建物プランを、数棟の屋根施設をもって示すにとどまっている）。さらに同遺跡を平泉館と認定するには、いまだ確証に欠ける。問題の平泉館の建物遺構がいまもって確定していないのである。残念ながら、その建物復元にあたっては、将来における加羅御所遺跡の発掘調査に期待するしか方法はないのである。同御所の存続期間は、僅か十年から二十年程度。おそらく建物プランも、柳之御所遺跡ほど複雑なものではあるまい。柳之御所遺跡の建物構造は、加羅御所遺跡のそれをもって検証されねばならぬのが現在の研究段階なのである。

つまり、あれほど多くの事実が判明した柳之御所遺跡にしても、その総合的評価についてはいまだ時機尚早なのである。であれば、同遺跡ほど調査と研究が進展していない他の史跡についても推して知るべし。

では、庭園遺産はどうか。毛越寺庭園や観自在王院庭園が見事なまでに復元整備がなされていることは周知のところだが（後者についてはいまだ不十分な部分を残す）、このほか中尊寺に2庭園、そして無量光院庭園の5庭園を平

泉は有している。現在、中尊寺の1庭園と無量光院庭園の試掘および発掘調査が進行中だが、平安浄土庭園の遺構がこれほど集中的に遺存する地域は平泉に限られ、その調査成果には大いに期待をよせていいだろう。しかし、これも右と同様、その全容が解明されたわけではなく、ましてや平泉庭園文化群としての総合的判定が学術的に下されたわけでもまったくないのである。むろん、発掘調査は今後もっと進行するであろうが、その解明にはかなりの時日を費せねばならぬであろう。世界遺産登録を急ぐあまり、遺跡破壊に繋がりがかねぬ性急かつ粗雑な調査がなされては絶対にならぬからである。

もはや明らかであろう。こうした史跡調査の現況を直視するとき、平泉世界遺産化の二大コンセプト、生活文化遺産と庭園遺産の構想がいかに拙速で実効性が追いつかぬものであるかお分かりいただけるであろう。思うに、こうした遺跡偏重の在り方は、どうも近年の平泉研究の動向に根差してはいまいか。

平泉を研究しようとする場合、大きく分けて文献史料にもとづく歴史学的研究と発掘調査を中心とした考古学的研

究とがあるが、両分野が結合した最大の成果が柳之御所遺跡の調査研究と保存運動であった。主に東北在住の歴史学・考古学研究者によって結成された平泉文化研究会がその先導役となり、手弁当て多くのシンポジウムや研究会などが開催された。しかし、同遺跡保存が一たび決定されるや、平泉遺跡群の発掘調査情報はまったくいいいほど公開されることはなくなった。情報開示を求めて、平泉町をはじめとする関係諸機関にどれほど足を運び、訴えたことか。有り体に言えば、発掘情報は考古学研究者の占有するところとなったのである（ただし同機関の内部には、積極的な情報公開を唱える意見も複数あったと仄聞する）。この結果、当然ながら歴史学分野による平泉研究は著しく停滞した。こうした現状を見かねてか、岩手県教育委員会主催の平泉文化フォーラムにおいて情報開示がなされたのは、やっと二〇〇一年になってからのことで、二〇〇四年には第四回フォーラムが開催されるにいたっている。

平泉世界遺産化のコンセプトが史跡偏重に傾いたのは、どうもこうした研究動向が影を落としてはいまいか。しかも世界遺産化の所管が、国内の史跡地などの調査や整備を

専管する文化庁記念物課であったことも無視できない。であれば、『吾妻鏡』にもとづく「都市平泉」研究の成果と金色堂に代表される文化財の在り方とが、コンセプトにおいて重視されぬのも無理からぬことかもしれない。

ヨーロッパ価値基準の世界遺産

— 金色堂の独自性と国際性 —

むしろそれには、金色堂を除く盛時の平泉寺院すべてが壊滅し去った点も大きく関係していよう。だが、これはあまりよく認識されていないことだが、それをもってしても平泉は、多くの国宝・重文クラスの文化財や庭園遺構などが一極に集中する院政期仏教文化の一大宝庫なのである。しかも、あまたの古代・中世寺院がひしめく京都や奈良において、金色堂の荘厳を凌駕する堂舎は一つとして見出せない。院政期文化の美意識は「美麗」なることをもって大きく特徴づけられるが、金色堂の荘厳こそ、その美麗性を極限にまで追い求め、極楽世界の無量光性を可視化した院政期文化のモニュメントであった。現在、金色堂は平安浄土教文化の一つの頂点として建造物・仏像彫刻・仏具類の

すべてにわたって国宝に指定され、世界遺産登録の前提条件となる国内的評価も既に確立している。

ヨーロッパ価値基準にもとづくユネスコ世界遺産委員会のプレゼンテーションの場で、人類共通の遺産性という観点から、平泉文化の理念そのものを象徴的かつ具体的な形で提示できなければ根本的な説得力に欠ける。シンボル性と理念性と具体性とインパクト性の点すべてにおいて、黄金の金色堂を超越するものは存在しない。まさしく中尊寺金色堂こそ、英語国名ジャパンの語源ともなったジパング（黄金の島）そのものを見事なまでに体現しているのである。

これは私の独断などでは決してない。二〇〇四年十月、京都での日本史関係の学会の折、平泉とともに石見銀山遺跡で世界遺産登録（産業遺産）を目指す、島根県教育庁の佐伯徳哉氏（世界遺産推進室主幹）と会談する機会があった。もちろん佐伯氏は、世界遺産候補地の視察で何度なく平泉を見学されている。日本中世史の研究者でもある同氏は金色堂の世界遺産性を幾度も力説され、ヨーロッパ価値基準に適合したプレゼンテーションの必要性をとくに強

調査された。平泉の文化遺産が有する理念性や哲学性を、国際的な見地から主張できなければ評価はかなり厳しいものとならざるを得ない、というのであった。世界遺産問題の実務にも通曉された同氏の金色堂観と提言は大いに学ぶべき点が多い。

金色堂に対するこのような評価は最近よく耳にするが（問題の史跡の評価も、私と同意見の考古学関係者が多い）、その国際性は別の側面からも裏付けられる。一一八九年の『吾妻鏡』は、金色堂が三つの須弥壇を有したことを明記するから、初代清衡による一一二四年の創建時より、藤原三代の遺体が順に金色堂に安置されたことは確実である。こうした墓堂の構想は、実はキリスト教圏の中世ヨーロッパ社会においても存在した。

たとえば、ヴェネツィア（イタリア）のサン・マルコ大聖堂は聖人マルコの遺体を安置した墓堂、キリスト教会だが、それはヴェネツィア共和国市民の守護神として、一〇九四年完成のものが現在の大聖堂（創建は八二八年）であるという。内外が金色に輝くこの大聖堂が営まれたサン・マルコ広場には、総督官邸（ドゥカレ宮殿）やそれに付

随する官庁なども併設されて公的な儀式や祝祭などが同広場で催され、今日のような広場の形態が整ったのは一一七〇年代のことであったという。

つまりはサン・マルコ大聖堂こそ、都市ヴェネツィアの理念の原点であったわけで、この大聖堂と総督官邸との政治的関係は、まさしく都市平泉における金色堂や無量光院と平泉館との関係にも相当しよう。しかも年代はともに十二世紀後期のことで、洋の東西において期せずして同様の都市構造が構想されていたことはきわめて注目値する。その意味で、平泉館施設が発掘調査で判明すれば、ヴェネツィアとの比較文明的な都市研究も今後可能となる。

さらに、ローマ・ヴァツィカン（イタリア）の有名なサン・ピエトロ大聖堂も聖人ペテロの墓上に創建（旧大聖堂は三一九―三五〇年間、現在の大聖堂は一六一五年完成）されたものといい、ここに世界文化遺産指定の兩大聖堂と通じ合う、金色堂の国際的性格が明らかとなる。

「文化的景観」概念から見た平泉の世界遺産性

―無量光院景観の独創性―

前述したように、ユネスコ世界遺産委員会は「文化的景観」の概念も大きなコンセプトの一つに掲げるが、平泉において最もそれが顕著なのは、無量光院庭園遺跡の宗教的自然景観であろう。

無量光院は、三代秀衡が極楽浄土の宮殿を平泉の地に再現すべく造営した平等院ヴァージョンの浄土教建築だが、とりわけその選地にあたっては、背後に連なる山稜（関山―金鶏山―塔山）との緊密な一体感がつよく意識され、併せて日没時における稜線上への落日信仰も構想されていた。同院の正面に構えられた加羅御所から秀衡がこれを望めば、現世の象徴たる山稜と来世の象徴たる無量光院とが一つに融け合って現世景観がそのまま来世景観へと変貌し、さらに同院へと秀衡が歩みを運べば、現し身のまままで極楽往生が実際に体感できるよう、きわめて周到な工夫と配慮がこらされていた。

このように四季の移ろいと彩りを映した現世景観と永遠性をやどした来世景観との相即不離な一体性を強調し、し

かも現世空間たる加羅御所から来世の浄土空間たる無量光院への参入を志向した現世往生のプラン、現実世界と浄土世界との往還を可能にした神話的装置の構想は史上はじめて平泉で実現したもので、それは日本的な宗教的自然観に根差した、わが国独自の浄土思想文化の開花をも意味していた。日本的な浄土教思想の高みは、いわゆる高僧や名僧知識などによる、高度な教説によってのみ達成されたわけでは決してなかったのである。こうした現世往生のシュミレーションこそ、等しなみ誰でもが往生体験可能な装置として考案されたものであり（そのことは、いまだに現地ヴァーチアルな体験が可能である点から証明される）、ここに日本仏教は、「現世」即「浄土」というアイデアそのものの世界を、万人が等しく目視、体感できる具体的な造形として創出し得たのであり、日本文化史上におけるその意義は限りなく大きい。京都の王朝都市にあらざる、鎌倉に先駆する史上初の武人政権都市平泉においてそれが達成されたことはまったく特筆に値する。

幸いにも、中世のころ焼失した無量光院などを除き、その宗教的庭園景観はほぼ往時のまま遺存して雄大な「文化

的景観」を形作っており、ここに同景観が有する世界遺産性を主張することができる。同地域一帯の景観保全と慎重なる発掘調査が何にも増して切望される所以なのである。

同様に、毛越寺と観自在王院の両庭園遺跡においてもその文化的景観性は誇るべきものだが、さらに金色堂へのアプローチ、中尊寺月見坂から金色堂へと到る参詣道もこれに該当しよう。ことに月見坂参詣道の場合、建武元年（一三三四）の中尊寺文書にも「月見坂」として登場する重要な参拝ルートにあたり、周辺地域の環境をも含めた、本来の寺院境内地に相応しい営利目的を脱した文化的景観の保全が何より求められよう。それは公共的な文化的景観性が個人的な土地所有権や商業権に優先するという考え方であり、このことは中尊寺「大池」庭園景観についてもまったく適合する。

「山容―寺院―園池」の三位一体的関係からなる中尊寺「大池」景観は、右の無量光院景観において出現した「金鶏山―無量光院―園池」からなる一体的関係のスタートラインに位置するもので、初代清衡時代からの庭園遺構であることが発掘確認されつつある。これは二代基衡の毛越寺

においても「塔山―毛越寺―大泉が池」の関係として表れ、こうした平泉独自の三位一体的構造こそ、源頼朝の鎌倉・永福寺などによい影響を及ぼしたものであった。無量光院庭園や毛越寺・観自在王院庭園と同様の観点から、中尊寺「大池」庭園景観の保全はきわめて重要な課題である。

もういくつかの課題

― 結びにかえて ―

もはや多言を要すまい。平泉の文化遺産の世界遺産登録を推進するにあたっては、中世キリスト教圏のサン・マルコ大聖堂やサン・ピエトロ大聖堂とも響き合う、既に国内的評価が確立した中尊寺金色堂をコンセプトの前面へと押し出し、これを右述した庭園景観遺産と生活文化遺産とが補翼するコンセプトが望ましい、と私は思う。こうま高邁な理念性や哲学性が要求されるヨーロッパ価値基準のユネスコ世界遺産委員会のプレゼンテーションの場で（ここではヨーロッパ価値基準自体の是非は問わない）、平泉の都市理念を体現した金色堂の国際性と無量光院庭園景観の獨創性こそが確実な有効打を打ち得るのではないか。私はひそかに

そう思っている。

そして平泉の世界遺産化を推進するうえで大きな要件として、平泉文化なるものの真価を客観的に検証する学術調査研究体制の整備と専門研究機関の設置、すなわち従来からつよく叫ばれてきた平泉文化研究所の創設が是非とも求められるであろう。確かにその点で、先に紹介した平泉世界遺産化PRパンフレットには、登録に向けた課題の一つとして、「平泉文化の総合的な調査・研究のため、全国の研究者との共同研究の推進」が大きく謳われていた。しかるに、平泉町世界遺産推進協議会が作成した同推進事業費の予算書（二〇〇四年―二〇〇七年間）を一見するに及び、言葉を失った。発掘調査費や史跡整備費、あるいは公有化費などは当然ながら予算化されているが、何とも驚くことに肝心の学術調査・研究費がなく、その項目自体がそもそも存在しないのである。史跡地を取得、発掘調査し、史跡整備を試みれば世界遺産化にすぐさま繋がるとでも思っているのだろうか。ここにおいても拙速な史跡偏重の影が濃く差している。

しかも、それだけではない。同じくPRパンフには、

「平泉文化の情報発信による住民意識の高揚」も登録課題の一つとして掲げられているが、これに反して、公費による中尊寺・無量光院庭園遺跡調査に関する市民に向けた現地説明会すらなされず、「情報発信による住民意識の高揚」がはかられた形跡がないのである。浄土庭園による世界遺産登録をスローガンに掲げながら、である。確かに、平泉文化フォーラムでは史跡調査情報が開示されるよう改善されたが、しかしそれは現地説明会に代わり得るものでも、また同フォーラムが右の調査研究体制に相当するものでもないのである。果たしてこれで世界遺産登録が本当に実現するのであるか。そして、いまだ不十分な史跡調査の現状のなかで、平泉の文化遺産の一体いかなる世界遺産像をあみ出そうというのであろうか。

関係諸機関には、平泉の歴史と文化および文化財や史跡に関する深い学識に裏打ちされたバランスのとれた識見が何より求められているはずであり、それを欠くようでは世界遺産化の道程は険しく遠い。私は、右述した諸点において平泉の文化遺産が世界遺産性を有することを固く信じているし、また世界遺産登録を実現するためにも、かつての

平泉文化研究会が果たした役割を是非ともいま一度思い起こしてほしいとつよく思っている。それが平泉文化研究所の創設に結びつくのであれば、これに過ぎることはない。

平泉の世界遺産登録問題に関わられた方々の努力が是非とも報われるためにも、失礼ながら関係諸機関における登録に向けた発想の転換とさらなる精進を願ってやまない。

以上、一方的で非礼な言辞に終始したかもしれないが、世界遺産登録を契機とした平泉の歴史的環境の保全を何より願うための率直な提言であり、もとより他意はない。どうかこの点をご了解いただきたい。

(中尊寺仏教文化研究所主任)

〈参考文献〉

菅野成寛「平泉の宗教と文化」

(入間田宣夫・本澤慎輔編『平泉の世界』高志書院、二〇〇二年)

菅野編著『週刊 日本遺産 平泉』二七号

(朝日新聞社、二〇〇三年)

饗庭孝男・陣内秀信・山口昌男『ヴェネツィア』

(東京書籍、一九九三年)

永井三明『ヴェネツィアの歴史』

(刀水書房、二〇〇四年)

ルカ・コルフエライ『図説ヴェネツィア』

(河出書房新社、一九九六年)

石鍋真澄『サン・ピエトロ大聖堂』

(吉川弘文館、二〇〇〇年)

陣内秀信『都市を読む イタリア』

(法政大学出版局、一九八八年)

青山吉信『聖遺物の世界』

(山川出版社、一九九九年)

文化庁編『文化庁月報』四二二号(ぎょうせい、二〇〇三年)

史学会編『史学雑誌』一一三編一二号

(山川出版社、二〇〇四年)

新指定の国宝「金色堂壇上諸仏」

平成十六年三月十九日、国の文化審議会文化財分科会から「金色堂内諸像及天蓋」の国宝指定が答申された（六月八日に官報告示され正式指定）。

建造物としての金色堂は、明治三十年（一八九七）十二月、古社寺保存法施行に伴う第一回目の指定で特別保護建造物となり、昭和二十六年（一九五二）六月に国宝建造物第一号の指定を受けている。

金色堂内陣の須弥壇上に安置されている諸仏は『中尊寺文書』によっても損傷が少なくなかったことが知られる（「嘉暦二年三月中尊寺衆徒等解文案」）、また、近世における修理が施されていたこともあってか文化財指定は遅く、昭和三十一年六月に至ってようやく重要文化財に指定され、その後の保存修理を経て現在の姿となっていた。なお、仏像の配置構成が、後世、移動のあったことも先学諸氏により種々に指摘されてきたわけであるが、寺側として

は容易に配置を移し替えるわけにもいかず、現状はそのままにしてある。

今回の指定に係る、文化庁の発表資料には、

天治元年（一一二四）藤原清衡が中尊寺内に建てた金色堂には、清衡自身の遺骸を納める須弥壇上に十一軀の仏像が安置され、ついで基衡、秀衡の各遺骸を納めた二基の須弥壇も増設され同じ構成の仏像が置かれた。流失した一部の像を除き大部分の像は当初のまま残っており、かけがえのない貴重な文化遺産となっている。近年の調査により、諸像の技法構造が一層よく把握され本来の壇に関する復元的研究も進んだ状況をと踏まえて、工芸国宝だった天蓋てんがいを分割所属替えした上、国宝へ格上げする。（平安時代）

とある。補足説明する。

「近年の調査」とあるのは、中尊寺仏教文化研究所『論集』第二号（平成十六年三月発行）所収の東北大学大学院助教長岡龍作氏の論文にあるように、平成十二～十四年度の三年連続で金色堂壇上諸仏の調査が行われ、その中においてX線透過撮影が初めて実施され、各仏像の技法及び

構造と、諸仏の組み合わせ（本来どの須弥壇にどの仏像があったのか）に新たな知見が得られたことを指している。これは東北大学名誉教授有賀祥隆氏をはじめとする調査研究の報告で、今回の国宝指定の大きな要因であったろうと思われる。

次に「流失した一部の像」とは、阿弥陀如来坐像一軀（現在西南壇安置）が他壇（中央壇・西北壇）と像高や印相が違うことから金色堂本来の仏像ではなく、失われた像を補うために他より移安されたとみられていること、西南壇の増長天立像一軀（向かって左側）が失われていることを示している。天蓋は仏像の頭上に懸吊かけつるされる荘嚴具しょうげんぐであるから壇上諸仏と一緒にするのが自然であろうということ、工芸部門の国宝「中尊寺金色堂堂内具」から分割所属替えされ、彫刻部門の「金色堂堂内諸像」と統合されて「金色堂堂内諸像及天蓋」という名称で国宝に指定されたわけである。

金色堂壇上諸仏は金色堂とともに、奥州藤原氏滅亡、建武四年（一三三七）の大火をはじめとし、幾度かの大きな災

難・危機に直面したわけだが、そのたびに中尊寺とこの地域に生きた先人たちの必死の努力により護りぬかれてきた。今回、国宝指定の報に接し、至宝を現在まで護持し伝えてくれた先人たちのご苦労に対して心から敬意を表し、奥州藤原文化の遺宝を未来へ確実に伝えるべく、今後とも文化財の適切な保存に努めていきたい。

（管財部執事 北嶺澄照）



金色堂内陣正面

福聚教会中尊寺支部 西日本奉詠舞大会に招待出演

昨秋、十月十九日に鳥取県鳥取市で福聚教会西日本奉詠舞大会が開催された。福聚教会中尊寺支部は、毛越寺支部と合同で東日本代表として招待を受け、合同会員二十七名が、宗祖大師御影と千四百名の聴衆を前に、前年の大会における優勝曲「大黒天和讃」を奉詠した。

福聚教会は、東・西奉詠舞大会を毎年交互に開催しており、十五年に千葉県で開催された東日本奉詠舞大会において、隣山毛越寺支部と合同で出場して詠唱の部で優勝した。佐々木仁秀先生の熱心なご指導と、各会員の熱心な修練とお稽古研鑽の成果が実を結んだものである。二年連続の優勝をバネとして、今後も詠讃道を通して、信仰の涵養に努めていきたい。

(菅野宏紀)



風信 / 語録 貫首の意見に拍手送ります

花巻市 佐々木羊三

(岩手日報・声 より) 平成16年9月3日

◇先日、花巻で開かれた「平泉の文化遺産シンポジウム」の席上、パネリストを務められた中尊寺の千田貫首さんの意見に同感です。

「賢治の『雨ニモマケズ 風ニモマケズ』で始まる文の最後は『サウイフモノニワタシハナリタイ』で終わっているが、その後の『南無妙法蓮華經』も入れるべきだ」。私は拍手を送りたい気分でした。

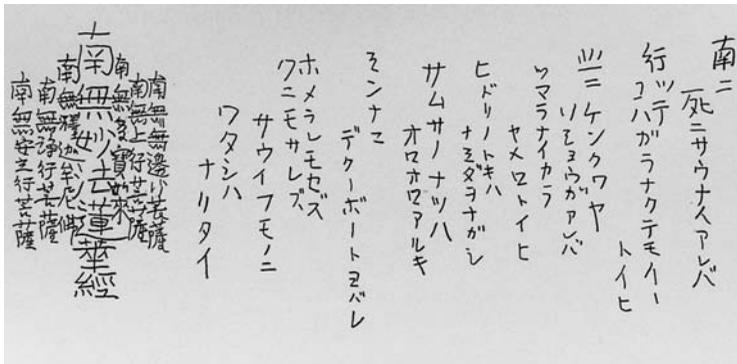
私が「雨ニモマケズ手帳」を手に入れたのが約二十年前。当初はただ見るだけでした。定年退職を機に、写経のつもりで小倉豊文先生（故人）の解説書を頼りに手書きを試みたのが十二年前でした。

没後見つかったこの手帳は百六十ページを超えるもので、手書き

してみても、何か、全体がお経のように感じられました。それ以来「雨ニモマケズ」を読むときは南無妙法蓮華經まで読んでいます。

ポランティアガイドの中で、そのことを伝えたことがあります。「へえー」という驚きの声を聞くだけで、あまり自信がありませんでした。

そして、今回の千田貫首さんの力強い発言をお聞きし安心しました。自信を持って伝え続けたいと思います。ありがとうございます。



(朝日新聞・東北自慢 より 平成16年7月31日)

つい先日、平泉の世界遺産登録推進をテーマとするテレビ番組の収録に出掛けてきた。まだ国内での暫定登録の段階なので、実現に向けて平泉の重要性を県民に訴えるという内容だったが、まあ、このことについては私は楽観している。

これまでの例から見ても、暫定登録さえされれば順番にユネスコに申請され、ほぼ間違いなく世界遺産に登録されると信じているからだ。日本は申請に関してとても慎重で、絶対に登録されるものしか選ばない。実際すべてが申請、登録という結果になっている。国内での暫定登録を勝ち得る方がその意味でははるかにむずかしい。

だから私は、県民に平泉の歴史

的重要性などを伝えるより、世界遺産に登録されてからのことを今から考えておくのが大事だと力説した。

世界遺産となると、それこそ全世界の目が平泉に向けられる。マルコポーロが日本を黄金の国と紹介したのは、世界のはとんどの人が常識として持っている。その黄金の国とはすなわち平泉であったと知れば、これまでの日本の世界遺産のどこよりも関心を持たれるに違いない。ひよっとすると、京都と並ぶ有名な地になるかも知れないのだ。せっかく訪れる人々に失望されず、しかも正しい東北の歴史を紹介する道を、今から考えていかななくてはならない。

そんなことを主張して無事に収

録は終わり、帰り支度をしていたら、対談相手の千田孝信中尊寺貫首に呼び止められた。本堂に飾っている藤原一族の位牌の中に、今度ようやく初代清衡の父親である藤原経清と、母親の位牌を足し加えることができたというのである。

それを実現したいという話は、千田貫首から以前何度かお聞きしていた。平泉の文化は、清衡公一人が^{こしら}拵上げたのではない。父親の経清公の東北への愛があつてこそのものである。その千田貫首の熱い思いには感激していたものの、内心ではむずかしいだろうと思っていた。藤原経清は安倍貞任と組んで朝廷に刃向かった逆賊と歴史上では見なされている。いかに中尊寺でも……と諦めていた。

それを実現なされたと言うのだから、驚きより信じられなかった。きよとんとしていた私に、千田貫首は「これで中尊寺の歴史が完全なものになりました」と笑顔で付け足された。

なんだか胸が詰って涙が出そうになった。藤原経清を主人公に据えて蝦夷の正統性を主張した私にすれば、なによりの喜びである。

もちろんすぐにその位牌を拝ませて貰った。経清と妻の二人の位牌はとて誇らしげに藤原四代のそれらと並んでいた。位牌が笑っているようにも感じられた。なにしろ本堂なのである。中尊寺の温かな決断というしかない。感無量で位牌を拝し、中尊寺に心から感謝した。ここに納まるまで経清夫

婦は九百年を天上で見守っていたのだ。そんな気がした。

何億を投じてどこかを修復するより大きい意味がある。私は幸福な思いに包まれた。(作家)

・・・・・

白符忌 法則 (抽出)

毎歳九月十七日

陸奥国 関山中尊寺 この道場に於いて 關山の浄侶 丹誠を抽んでて

藤原経清公祥月命日頓証菩提 並びに 奥州藤原氏六親眷属諸精霊 仏果菩提の為に 阿弥陀経読誦の法要を修することあり

その旨趣如何となれば夫れ 藤原経清公は 依藤太藤原秀郷一門の系譜に連なり 陸奥守源頼義に具して互理権太夫散位を号す

奥六郡の豪族安倍頼時の娘を娶り地域に土着して奥州の鎮撫を図る然りと雖も

前九年の役起こるや 公私背反の苦衷の果て 敢然として身を安倍一族方に投じ 白符を掲げて官軍源氏に抵抗 厨川で奮戦の末遂に斬首の刑に服したり

誠なるかな 経清公 無比の献身あってこそ 陸奥民衆の信愛は 奥州藤原氏一門に鍾まり

清衡公以下四代の燦然たる偉業の礎を拓きたるなり 誠にもって経清公は奥州藤原一族の始祖といいつべし

宜なるかな 一心称名は一念十念極楽に生じ 六方讃歎は八万億劫の罪障を滅す

研究／出版

平成十五年十一月～平成十六年十二月

〔出版〕

中尊寺仏教文化研究所『論集』第二号

「中尊寺金色堂壇上諸仏の調査について」

「中尊寺建立供養願文」を読む」

「藤原基成娘の鎌倉連行について

—藤原秀衡正妻・泰衡母・国衡妻の生涯—」

「視点」金色堂—明治の榮譽と傷痕—

「南部領金沢金山絵巻に見る近世の産金技術」

「中尊寺大長寿院所蔵宋版経調査概報」

「自然界からの贈り物—昔の人々は知っていた青森ヒバ成分中の生理活性性物質—」

稲森善彦・森田泰弘・岡部敏弘・石田名香雄

『国宝中尊寺展—奥州藤原氏の黄金文化と義経の東下り—』

「奥州藤原氏と平泉」

「歴史と寺観—「寺伝」に真実を読む—」

「金色堂の建築」

「奥州藤原氏三代の仏教美術」

「金色堂の荘厳」

「中尊寺経」

中尊寺

長岡龍作

大矢邦宣

川島茂裕

佐々木邦世

名村栄治

破石澄元・政次 浩

佐川美術館

大矢邦宣

佐々木邦世

鈴木嘉吉

有賀祥隆

河田 貞

破石澄元



『佛教藝術』二七七号 特集 中尊寺美術研究の現在 佛教藝術學會編

「中尊寺彫像研究の現在」

毎日新聞社
浅井和春

「中尊寺金色堂壇上諸仏研究の現状と問題点」

武笠 朗

「中尊寺一字金輪像について」

水野敬三郎

「中尊寺経蔵の文殊五尊像について」

奥 健夫

「大長寿院蔵金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図覚え書き」

林 温

「金色堂と舎利法」

内藤 榮

『源義経 流浪の勇者―京都・鎌倉・平泉―』 上横手雅敬編著

文 英 堂

(平成十二年、平泉郷土館で開催されたシンポジウムの内容をもとに刊行)

「源義経の生涯といろいろな見方」・「いまなぜ義経なのか」

上横手雅敬

「義経を支えた人たち」

野口 実

「源平合戦後の義経」

前川 佳代

「奥州藤原氏と奥羽」

岡田 清一

「藤原秀衡の奥州幕府構想」

入間田宣夫

「子どもの本と義経」

千葉 信胤

『中尊寺・毛越寺』JTBキャンパックス古寺巡礼⑥

J T B

『トランヴェール』二〇〇四年九月号

特集 北方の王者と謳われた奥州藤原氏の平泉を旅する

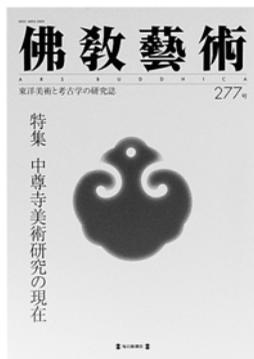
東日本旅客鉄道(株)

『京から奥州へ 義経伝説をゆく』

河北新報出版センター

図説『胆江・両磐の歴史』

大島英介監修 郷土出版社



〔論文〕

「奥六郡の関と津」 『古代蝦夷と律令国家』高志書院

「鎌倉期における中尊寺伽藍の破壊・顛倒・修復記録について」

『中世の地域と宗教』吉川弘文館

「平泉柳之御所跡発見の「磐前村印」と荘園公領」

『米沢史学』二〇号

「衣川長者ヶ原廃寺について」

『岩手考古学』一六号

「平泉遺跡群における12世紀庇付き建物」

同一六号

「『吾妻鏡』に見える郭について」

同一六号

「長者ヶ原廃寺の伽藍配置雑感」

同一六号

「藤原秀衡の「嫡男」西木戸太郎国衡について」

『六軒丁中世史研究』一〇号

「奥州藤原氏の時代」

『秋田市史』一

先史・古代通史編

樋口知志

川島茂裕

〔報告書〕

『花立I遺跡第2・3・4次 白山社遺跡第3次

西光寺跡第2次発掘調査報告書』

平泉町文化財調査報告書第八九集

平泉町教育委員会

菅野成寛

入間田宣夫

大石直正

金丸義一

鹿野里絵

川島茂裕

国生 尚



〔関山句囊〕

〈第四十三回 平泉芭蕉祭全国俳句大会（於中尊寺）より〉

貫祿の蓼ひきみうしなふ中尊寺
（大会長賞）

鍵和田柚子選 特選 前沢町 菅野 好子

尺蠖しゃくとりの夢のつづきや光堂
（中尊寺賞首賞）

特選 八王子市 沼田 布美

南無南無とはや初蟬の光堂
（平泉町観光協会長賞）

特選 所沢市 岡本 伸

白靴を辨慶堂に濡らしけり
（岩手県知事賞）

原田青児選 特選 江刺市 及川 梅子

早苗饗のをんなほとほと疲れけり
（みちのく発行所賞）

特選 水沢市 及川 忠子

特選 宮城県 高橋 桃泉

義経堂こちらとばかり道をしへ
（岩手日報社賞）

特選 宮城県 高橋 桃泉

らふそくの炎重たき梅雨の寺
（県議会議長賞）

小原啄葉選 特選 大船渡市 船野 広

夏ころも大きな風を羽織りたる
（毛越寺賞主賞）

特選 一関市 鈴木きぬ絵

万緑のくらすところに光堂
（岩手日日社賞）

特選 花巻市 村上 瑩子

紫陽花はけふのいろして中尊寺
（平泉町教育長賞）

戸塚時不知選 特選 杉並区 林 瑞夫

金色堂へ畏れつつゆく苔の花
（中尊寺賞）

特選 前沢町 岩村 文子

その奥に金色堂や梅雨の蝶
（平泉文化会議所賞）

特選 盛岡市 佐々木ヒロ

毛越寺生れのあやめ買ひにけり
（平泉観光協会賞）

小林輝子選 特選 水沢市 鈴木 利和

そばかすのほたる袋や翁みち
（みちのく発行所賞）

特選 前沢町 梅森 サタ

万緑の洗ひあげたる光堂
（岩手日報社賞）

特選 陸前高田市 菅原 和子

万緑や関山諸仏匂ひたつ
（平泉文化会議所賞）

川代くを選 特選 水沢市 菅原 モト

葭切よじきりの声かけのぼる義経堂

(毛越寺賞)

特選 北上市 松田 洋子

幼き日見し光堂かひ徽か臭くささ

(岩手日日社賞)

特選 紫波町 小田中京子

(兼題)

一塵もなき中尊寺あたたかし

鍵和田柚子選 特選 北九州市 松本 隆吉

南部伊達貫く流れ花菜雨

戸塚時不知選 特選 水沢市 佐々木青矢

大屋根に鳥の巣のある中尊寺

特選 花巻市 椛澤 田人

一山の花よつぐ瓔やう珞らくに光堂

小林輝子選 特選 室根村 小山 武三

大空は紺紙銀泥楯芽吹く

特選 前沢町 鈴木 恵子

千年の滴り止まらず平泉

『寒雷』九月 盛岡市 川代くにを

凜と火星釣瓶落しの光堂

『みちのく』一月 前沢町 服部 常子

芭蕉像笠脱ぎ給ふ薄暑かな

平泉町 斎藤その女

義経堂朝な夕なのほととぎす

ひた登る高館の闇恋堂

清衛忌僧入堂の夏衣

夏衣召され氣品の自づから

『みちのく』九月号 原田青児選 雑詠五句

鳥よぎる紅葉明りの月見坂

東和町 及川 梨花

中尊寺一樹一石の秋思かな

木の実ふる経蔵裏のこも隠り池

『草笛』二月号

光堂より出て吊せし初みくじ

『草笛』四月 水沢市 小林 昭子

金色堂過ぎし真向う竹の秋

『草笛』六月 一戸町 中館 キミ

三衡の一山堂宇新樹光

『草笛』 九月 一関市 小野寺 亨

薪能余韻の家路夏の月

『草笛』 十月 一関市 小岩奈美子

十葉の匂ひ重たき月見坂

『草笛』 十月 一関市 佐藤喜佐子

八月の風遊びをり能舞台

『草笛』 十月 水沢市 及川テツ子

束稲山はふるさとの山大文字 前沢町 木村 臥牛

・遺句 〈前沢町元町長・平泉芭蕉祭俳句大会に尽力〉

高館や駆け抜けてゆく北の秋 水沢市 飯島 雄一

〈第一回みちのく「二夜庵」俳句大会 小林輝子選 特選〉

菊の堂菊の叢の照り初めし 前沢町 佐々木比沙

〈第二回みちのく「二夜庵」俳句大会 小林輝子選 特選〉

みちのくの冬霧まとふ能舞台 水沢市 飯島 雄一

〈梧逸忌第14回全国俳句大会 佐治英子選 みちのく賞〉

◇句集『マグマ』

千葉 宣峰

金色の三尊おはすすみれ草

余寒なほ松にとどまる能舞台

風ひかる光堂より乳母車

金色の梅雨したたる光堂

判官の自刃の館や威銃

* 前沢町にお住まいの作者、平泉は目と鼻のさき、

自然と足が向かれるのでしよう。奥の細道の一節

に「光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す」

とあります。金色の三尊とすみれ草の取り合せに

作者の物を視る深さ、心のありようを感じます。

この句、芭蕉の「五月雨の降のこしてや光堂」

に対し「金色の梅雨したたる」と表現。光堂を際

立たせています。(『草笛』句集鑑賞・小林輝子)

◇句集『晩袴』

原田 青児

雪ふかきわがみちのくに朱唇仏

◇句集『揺光』

戸塚時不知

朱唇佛春蚕の覚めし音ひそか

春日傘金色堂へさしかかる

青饅あおぬたやまつりのまへの平泉

烏の子金色堂を指呼にせり

高館に春一番のとどかざる

梅雨茸金色堂のまへにかな

◇『俳句研究』2月号〈作品20句

「衣川」神蔵 器

金色堂

冬日断つ螺鈿四本の柱かな

泪かな光堂より龍の玉

泰衡公

首桶にのこす蓮の実十数個

願文の一切経や竹の春

騎師文殊菩薩にいろは紅葉かな

清衡公

菊の香くぐりに括枕の凹みかな

みちのくに西行桜冬芽立つ

一葉落つ大きくまろき切株に

高館や大根を引く音の中

いちまいの奥六郡や雪迎

不作てふ刈株高し衣川

判官館跡

水底に火の色走る草紅葉

一首坂綿虫一つ見て二つ

金売吉次家敷跡

塩やけの沢庵石の捨ててあり

妙好山雲際寺 義経と北の方

時雨るるや木片となる位牌二基

穴あな惑見し金泥の曼荼羅図

菰こも卷濟む松千本の毛越寺

綿虫飛ぶ南大門の礎石より

牡丹焚く片膝つきて太郎冠者

語部のうしろ豆はぎ月夜かな

註・雪迎は風に飛ぶ蜘蛛の子

囀の中に身を置く座禅かな

「たばしね」四月 宮城県 林 正芳

音もなく紅葉且つ散る光堂

「たばしね」十一月 一関市 千田 竹詩

山眠る金色堂を懐に

「たばしね」十二月 平泉町 斎藤その女

錦秋の中に居座る光堂

「読売俳壇」十二月 千葉市 小林 昭

〔関山歌籠〕

〈第二十五回 西行祭短歌大会〉

若かりし頃のおろかさまざまざと見せられて
をり暁の夢
(中尊寺貫首賞)

金成町 杉山百合子

百の蔓もつれしやうにわが心定まらぬままに
幾日か過ぐ
(平泉町長賞)

ひたすらの農の奢りと企てしフルムーン難し
妻が膝病む
玉山村 駒井 栄子

わが妻を育みくれし母逝きて固き足うら幾た
びも拭く
(平泉町観光協会長賞)

東和町 高橋 緑花

来むせにはま白な花と咲きねかし地ちにうづめ
し幾万の鶏
(岩手日報社賞)

玉山村 遠藤 吉光

中田英のヘディングシュート決まりしをまぼ
ろしの如く視つつ点滴受く
(岩手日日新聞社賞)

花泉町 小野寺政賢

盛岡市 阿部 源吾

〈歌集紹介〉

◇『光をつなぐ』（抜粋）

吉田英子

篝火

夕日さす能楽堂に「猩猩」は己が赤毛掴みて
舞へり

暮れがたき能楽堂に篝火を点して夏の闇深く
なる

秘仏

朱の唇智拳の印もふくよかに一字金輪仏頂尊
座す

草生

山肌に雪の「大」の字浮かびつつ束稲山の山
裾霞む

関山

新しき高館橋に花残る金鷄山の入り目を仰ぐ
春の日は菩薩も夜叉も通ひけむ俯き咲ける片
栗の道

「秀衡」を僧ら復習へる能堂に花びら運ぶ風
柔らかし

百代の過客の挽歌刻まれし楸邨の句碑巨きく
揺る

塔ひとつ経文一卷の文字に画く紺紙曼荼羅金
泥の光り

善磨の筆木々と西行の桜の歌碑は束稲山に對
く

鏡板の老松沈む宵闇に彼岸此岸を結ぶかながな

人居らぬ能楽堂の前庭に白くかがよひ夏椿咲

く
著菘の花白く咲かせて風通ふ能楽堂への道お

ぼろなる

老杉に蝸鳴けば薪能待てる人らが夕空あふぐ

老杉の洞に生れたる虎落笛月見坂より酒れ田

に下る

「国宝 中尊寺展」報告

北嶺 澄照

はじめに

平成十六年十月九日から十一月二十八日まで、滋賀県守山市の佐川美術館において特別展「国宝中尊寺展―奥州藤原氏三代の黄金文化と義経の東下り―」が開催された。一般公開に先立つ十月八日には、中尊寺より貫首ほか八名が出仕して開眼法要を、青蓮院門跡東伏見慈治名譽門主、妙法院門跡菅原信海門主、延暦寺森定慈等芳執行はじめ諸大徳、石徹白大師講上村修一氏、佐川美術館館長栗和田榮一氏ほか大勢の方々御随喜のもとに勤修、引き続き開幕式が行われ、五十一日間にわたる特別展がスタートした。

会期中、中尊寺貫首、元奈良国立文化財研究所所長の鈴木嘉吉氏による講演会、延べ三週間にわたる中尊寺僧侶の駐在説明も行われ、入館者は約三万人となり、一日あたり入館者数は佐川美術館開館以来の最高記録となった。

中尊寺の宝物を多数出陳しての展覧会は、平成五年に行

われた「中尊寺黄金秘宝展」以来十一年ぶりのこと。ここでは「国宝中尊寺展」開催について報告することにした。

佐川美術館の概要と開催にいたる経緯

「国宝中尊寺展」の会場となった佐川美術館は、佐川急便の創業四十周年記念事業の一環として設立され、滋賀県守山市に平成十年三月に開館した。常設展示室では日本画家の平山郁夫氏と彫刻家の佐藤忠良氏の作品を中心として展示。特別展示室では「比叡山延暦寺の名宝と国宝・梵鐘」、「上海博物館青銅器名宝展」などの特別展を開催してきた。因みに佐川急便の創業者は延暦寺東塔法華総持院昭和復興の大檀那であったから、天台宗に御縁のある美術館といえよう。

佐川美術館の河田貞常務理事、稲熊恒久事務局長、井上英明学芸員が願書を持参されたのは一昨年十月二十四日のことであった。それ以前に電話で何度か打合せを行い、出陳候補リストをあらかじめ送付していたので、寺内部においてある程度の事前検討を行った上でお会いす

ることができた。十一月二十六日には栗和田榮一館長が正式挨拶に中尊寺を表敬訪問され、その後、寺では数度の会議で詳細を吟味し、最終的に十二月二十日の一山協議会で「国宝中尊寺展」への出陳が了承された。

この「国宝中尊寺展」開催にあたって、中尊寺としての要望事項に「拝む対象としての展示の仕方に留意して欲しい」という一項があった。美術館側と協議した結果、丈六薬師如来坐像と石徹白大師講（岐阜県郡上市白鳥町）から特別に出陳された秀衡公寄進の虚空蔵菩薩坐像の前には三具足（燭台、香炉、華瓶）を置き、寺僧が駐在している間は開館前に勤行を行い、それ以外の期間は美術館側で灯明を点し、線香をあげていただくようにした。実際、来館のみなさまざま三具足があることにより、美術品としての展示だけではないのだと気付かれるようで、手を合わせて拝む姿がたびたび見られた。

一月から八月までは実務的な打合せが繰り返し行われた。凶録の写真撮影、出陳される宝物の下見の立ち会い、輸送計画の打合せなど関係者の来山は開催までに十回近く

となった。なお、「国宝中尊寺展」の事前告知を兼ねて、寺所蔵の平山郁夫画伯の作品を出陳しての展示が「平山郁夫が描く天台の寺 比叡山延暦寺と平泉中尊寺」（会期七月十七日〜九月十二日）として追加企画され、五月の一山協議会で了承され実施されることとなった。

九月、開催まであと一ヵ月となった。十六日から十九日までの五日間、出陳される国宝・重文を含む二十七件、七十点の宝物の搬出作業が行われた。特に金色院所蔵の丈六薬師如来坐像の搬出は深夜一時までかかる大作業となったのだが、丈六仏の構造を観察する機会を得るといふ貴重な体験をすることができた。開眼法要と開幕式の打合せが電話とファクスで繰り返し行われ、くわえて二十二日には佐川美術館に向き、金色堂五分の一模型の搬入に立ち会うなど、開幕を目前に控えて九月はあわただしく過ぎ去った。

十月七日、早朝の新幹線で一関を出発し、午後には佐川美術館に入り展示と式典の最終チェックに参加、ようやく八日午後の開眼法要とそれに続く開幕式をむかえることができた。翌九日からは一般公開、今度は館内での駐在説明のはじまりである。

佐川美術館での駐在説明

中尊寺の僧侶が美術館に駐在し、展示室で話をするということは、平泉中尊寺に生き、直接かかわってきた者の生の声をとどけるといふことだと思つた。出陳された宝物の文化財的、美術的な解説だけではなく、先人たちが寺宝をどのようにして護り伝えてきたか、平泉あるいは中尊寺の今は——といった、背景にあるものを感じ取っていただければということを中心とめて駐在説明にあつた。

朝、開館前に特別展示室に入り、灯明を点し、線香をあげて勤行し、あげた線香がちょうど燃え尽きる頃に開館時間となる。朝一番の来館者の方に「朝のお勤めが終わつたところですか。お線香の香りがしますね。お寺さんの展覽会らしくて、いい雰囲気ですね。朝早く来てこの雰囲気味わえて得をした気分になりました」と。そして、「平泉、いい名前ですナア。落ち着いて、やさしうてー」と。独り言のようにご婦人が感想をもらされた。

丈六仏の前から説明をはじめ、金色堂五分の一模型の前で金色堂の話をし、陳列順に説明しながら展示室をひとまわりすると三、四十分ほどかかる。一日に五〜七回これを

繰り返していく。来館のみなさまと会話をしながら説明している間は疲労など感じない。「きょうも一所懸命につとめた」という達成感を伴つた毎日であつた。

おわりに

今回、「国宝中尊寺展」に携わることができ、文化財の分野においてもそのほかの点でも得ることが多かつた。この貴重な経験を今後に生かしていかなければならない。駐在説明を実際にやってみて気付いたことは、中尊寺の場合、依頼があつて特定の方をご案内するということはあるが、不特定多数の来山者に対して直接に説明をしたり、こちらから話しかけたりということはほとんどないのが現状である。「モアベター」をめざしていろいろと取り組んでみる時期かと思う。大河ドラマ「義経」で脚光を浴びる今年がいい機会かもしれない。

なお、記録として写真と展示リストを掲げる。(管財部執事)

国宝中尊寺展

開眼法要・開幕式（10月8日）



石徹白大師講から特別出陳された虚空蔵菩薩坐像御宝前にて御法楽



開眼法要



展示を熱心にご覧になる方々



開幕式後の内覧会



天台座主猊下ご来館（10月12日）

「国宝中尊寺展」文化財出陳リスト

名 称	指 定	件数	点数	所 有 者
中尊寺金色堂内具	国 宝	1		金 色 院
金銅華鬘	国 宝		1	
金銅幡頭	国 宝		1	
螺鈿平塵案	国 宝		1	
磬架	国 宝		1	
磬架附金銅孔雀文磬	国 宝 附		1	
中尊寺経蔵堂内具	国 宝	1		大 長 寿 院
螺鈿平塵燈台	国 宝		1	
木造礼盤	国 宝		1	
紺紙金字一切経	国 宝	1	8	大 長 寿 院
附漆塗箱	国 宝 附		1	
紺紙著色金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図	国 宝	1	4	大 長 寿 院
金銅孔雀文磬	国 宝	1	1	地 蔵 院
中尊寺金色堂附棟札	国 宝 附	1		金 色 院
正応元年	国 宝 附		1	
永徳四年	国 宝 附		1	
紙本墨書中尊寺建立供養願文(北畠顕家筆)	重 文	1	1	大 長 寿 院
中尊寺文書	重 文	1		大 長 寿 院
藤原清衡経蔵別当補任状案	重 文		1	
金色堂壇上諸仏	国 宝	1		金 色 院
木造地藏菩薩立像(西北壇)	国 宝		1	
木造持国天立像(西北壇)	国 宝		1	
木造地藏菩薩立像(西南壇)	国 宝		1	
金色堂須弥壇内副葬品	重 文	1	18	金 色 院
木造薬師如来坐像	重 文	1	1	金 色 院
木造大日如来坐像	重 文	1	1	金 剛 院
金銅积迦如来御正躰	重 文	1	1	円 乘 院
金銀装舍利壇	重 文	1	1	金 色 院
中尊寺経蔵附棟札	重 文 附	1		大 長 寿 院
嘉元二年	重 文 附		1	
露盤羽目板(孔雀文、迦陵頻伽文)		1	2	大 長 寿 院
宋版一切経		1	6	大 長 寿 院
宋版一切経唐櫃		1	1	大 長 寿 院
後三年合戦絵詞模本		1	1	中 尊 寺
義経画像		1	1	金 色 院
弁慶画像		1	1	金 色 院
源義経公東下り絵巻		1	1	大 長 寿 院
平泉諸寺参詣曼荼羅		1	2	中 尊 寺
平泉全盛古図		1	1	利 生 院
平泉全盛古図		1	1	願 成 就 院
金色堂5分の1模型		1	1	中 尊 寺
螺鈿八角須弥壇復元模造		1	1	中 尊 寺
		27	70	

「国宝中尊寺展」中尊寺所蔵平山郁夫画伯絵画作品出陳リスト

本画

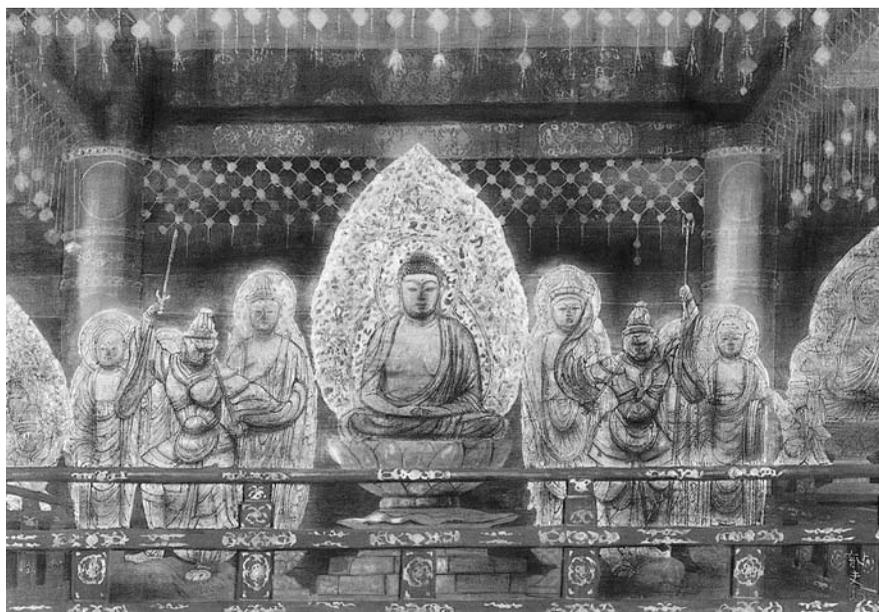
中尊寺秘仏 一字金輪仏頂尊像
慈光(中尊寺金色堂)

素描

中尊寺秘仏 一字金輪仏頂尊像
中尊寺 金色堂内陣
中尊寺 金色堂
中尊寺 月見坂
中尊寺 大長寿院西谷坊山門
中尊寺 経蔵
中尊寺鎮守 白山神社能楽殿

※平山郁夫画伯の絵画作品は下記の通り展示された。

1. 「平山郁夫が描く天台の寺比叡山延暦寺と平泉中尊寺」
(7月17日～9月12日、於特別展示室)
2. 「国宝中尊寺展」
(10月9日～11月28日、於平山郁夫展示室)



慈光 (中尊寺金色堂) 平山郁夫画

〔陸奥教区宗務所報〕 第二部 中尊寺関係

平成十五年十一月一日～平成十六年十一月三十日

□ 平成十五年

十一月十五日

天台宗一斉托鉢 於宮城県築館町

山内より七名参加

集まった浄財は築館町社会福祉協議会に寄託した

十一月十五日

陸奥教区研修会

「開宗千二百年慶讃大法会記念特別授戒会」

講師 嶽内真弘師

山内より八名参加

十一月二十二日

陸奥教区法要 於盛岡市千手院

山内より十名参加

□ 平成十六年

三月十四日

布教養成所研修会 於中尊寺

「述べて作らず」

講師 佐々木邦世師

山内より十二名参加



六月九日～十日

東北・北海道地区布教師協議会総会・研修会

於福島県郡山市

山内より二名参加

六月二十一日

天台宗保護司会、民生・児童・主任児童委員会合

同研修会 於岡山県岡山市

地藏院 佐々木秀圓出席

六月二十四日～二十五日

中央法儀音律研修会

観音院 清水広元出席

八月二十六日～二十九日

教師安居会

大長寿院法嗣 菅原光聴出席

法泉院法嗣 三浦章興出席

九月五日

声明公演 於一関文化センター

山内より貫首はじめ九名参加

十月二日

陸奥教区法要 於宮城県西光寺

山内より五名参加

十月二十三日

天台宗一斉托鉢 於青森県尾上町

山内より七名参加

集まった浄財は尾上町社会福祉協議会に寄託した



十一月二十七日

一隅を照らす運動岩手地区大会

船村徹講演会

「歌は心で歌うもの」

貫首はじめ山内住職、寺庭婦人等多数参加

講演会で集まった浄財は新潟県中越地震義

援金として四十万円、平泉町の「世界遺産

登録推進」寄付金として三十万円、それぞ

れ関係機関に寄託した

□ 役職任免

開宗千二百年慶讃大法会企画委員会

(平成十五年十一月一日)

委員任命 陸奥教区宗務所長

菅原光中

中央所得調査会

(平成十六年二月二十七日)

委員任命 陸奥教区宗務所長

菅原光中

中央教師選考会

(同年二月二十七日)

委員任命 陸奥教区宗務所長 菅原光中

陸奥教区宗務所

(同年三月十五日)

教区出版通信員委嘱 観音院

清水広元

天台宗典編纂所

(同年四月一日)

編纂委員任命 円乗院

佐々木邦世

電子仏典員任命 瑠璃光院

菅野康純

財団法人天台宗教学財団

(同年五月二十日)

評議員任命 陸奥教区宗務所長 菅原光中

陸奥教区宗務所

(同年十月一日)

監事任命 地藏院

佐々木秀圓

□ 褒賞 (平成十六年十月二十三日)

住職三十年勤続功労表彰 真珠院 菅野澄順

積善院 佐々木仁秀

□ 教師補任（平成十五年十二月一日）

権律師 願成就院法嗣 三浦智信

（平成十六年四月二十一日）

権大僧正 大長寿院 菅原光中

僧正 円乗院 佐々木邦世

少僧都 円教院法嗣 千葉快俊

（同年十二月十日）

中律師 円乗院法嗣 佐々木五大

□ 『台密諸流伝法印信纂脩』一式

比叡山延暦寺へ寄贈 真珠院 菅野澄順

☆ 集中豪雨被害復旧支援募金

四十九万七千九十二円 中尊寺

一隅を照らす運動総本部へ寄託した

☆ イラク復旧支援募金

五万五千八百四十六円 中尊寺

（財）日本ユニセフ協会へ寄託した

☆ ユニセフ外貨募金

一万七千円 中尊寺

（財）日本ユニセフ協会に寄託した

☆ 新潟県中越地震復旧支援募金

十三万六千九百十九円 中尊寺

日本赤十字社に寄託した（募金継続実施中）

☆ スマトラ沖地震復旧支援募金

十三万五千三百八十八円 中尊寺

一隅を照らす運動総本部へ寄託した

（募金継続実施中）

御神事能番組

五月四日

法楽
古実式三番

開口 三浦章興
祝詞 佐々木秀厚
若女 菅野宏紹
老女 菅原光聰

大鼓 千葉快俊
小鼓 菅野澄元
笛 清水広元
後見 佐々木慎有

能

竹生島

天女 佐々木五大
ツレ 三浦章興
シテ 北嶺澄照
ワキ 菅野成寛
ツレ 佐々木秀厚
菅野康純
間 菅野澄元

太鼓 菅野宏紹
大鼓 佐々木長生
小鼓 菅原光中
笛 佐々木秀圓

古実式三番

開口 三浦章興

五月五日

笛 菅野澄元
後見 千葉快俊

狂言 太郎冠者 菅野澄元
清水

主 佐々木慎有

能

鞍馬天狗

稚児衆 千葉 遵
子方 菅野裕康
（紗那玉） 佐々木亮
シテ 佐々木邦世 菅野靖純
ワキ 菅野康純 千葉 晃
ワキツレ 菅原光聰
間 西谷ノ能力 破石澄元
木ノ葉天狗 菅野澄元

太鼓 菅野宏紹
大鼓 千葉快俊
小鼓 佐々木仁秀
笛 清水広元

秋の藤原まつり
中尊寺能
十一月三日

狂言

次郎冠者 菅野澄円
太郎冠者 破石澄元

附子

主 佐々木慎宥

能

シテ 佐々木邦世

枕慈童

ワキ 菅野康純
ツレ 佐々木秀厚
菅原光聴

太鼓 三浦章興
大鼓 千葉快俊
小鼓 佐々木仁秀
笛 清水広元



枕慈童

松野奏風画

(能画展「松野奏風の世界」図録より)

執務日誌抄

平成十五年十一月十一日

十六年十一月三十日

平成十五年

◇十一月

十一日 平泉町民号（十三日、八島、

壇ノ浦古戦場 光聴参加）。

いっくら国際文化交流会十

七名来山（貫首心接 春興案内）。

十二日 和歌山県青年僧の会十四名

来山（公文研成寛案内）。

十四日 貫首、名取市にて講話（宮

城工業高専創立四十周年記念）。

十五日 天台宗全国一斉托鉢（十

六日、於築館町奥福寺 山内より

大徳院ほか七名出向）。

日光高校職員研修一行来山

（貫首挨拶）。

町づくりフォーラム（執事

長 於郷土館）。

十六日 北上市和賀地区へ中尊寺ハ

ス感謝の集い（執事長、記念

講演「あなたの中の仏に会いたい」

十八日 管財部秀厚、自衛消防隊研

修（二十日、於県消防学校）。

法務広元、本山中立法儀音

律研修会へ出張（二十日）。

平泉小学校六年生三十名来

山（総務部澄円応対）。

二十日 職員研修旅行（第一班）二

十一日、瑞巖寺・立石寺ほか 康

純・光聴同行）。

二十一日 貫首著書『花咲け みちの

く 地に実れ』インタビ

ュー（京都放送「比叡の光」）。

二十二日 陸奥教区法要（於盛岡千手院

山内より貫首、宗務所長光中ほか

九名出向）。

二十三日 天台会御速夜（結衆勤 本堂）。

秋期一山会議（大広問）

二十四日 天台会厳修（御影供 本堂）。

金色堂壇上諸仏調査報告会

（東北大教授有賀祥隆氏ほか五名

報告 大広問）。



二十五日 総務部澄円、観光キャラバ

ン出張（二十八日、新潟・金

沢方面）。

天台保育連盟（東京長命寺小

林師）十二名来山（貫首挨拶）。

国土交通省「衣川橋梁改築検討委員会」(執事長 於役場)

二十六日 佐川美術館館長(佐川急便会長)

栗和田榮一氏他三名来山
(佐川美術館「国宝中尊寺展」開催に先立っての表敬訪問 貫首・執事長・管財澄照応接。)

二十七日 日光市防火管理者の会来山

(貫首挨拶)。

職員研修旅行(第二班) 二十八日、瑞巖寺・立石寺ほか 成寛・章興同行)。

北上川リバーカルチャーA

会議(執事長 於一関アイポート)。

三十日 貫首、京都へ出張(妙法院晋山式)。

◇十二月

一日 月次大般若(本堂)

二日 文化庁記念物課長永山賀久氏来山(貫首応接・管財澄照案内)。

三日 参道一斉清掃(管財・職員)。

NHK大河ドラマ「義経」町

観光推進実行委員会設立総会に向けた準備会(管財澄照・総務部快俊・澄円 於役場)。

四日 京博特別展「金色のかざり」

に出陳の国宝金銅華鬘ほか九点還蔵(管財澄照立会 法務部章興、町観光キヤラバン出張(五日、山形・仙台方面)。

六日 エジプト特命全權大使マハムド・カレム氏来山(貫首挨拶・執事長案内)。

七日 薬師会(讃衡感)

吉村作治氏(考古学)来山(執事長案内)。

北上川リバーカルチャーA主催「北上川・ナイル川姉妹河川提携記念フォーラム」

(貫首・執事長 於ペリーノH)。

九日 総務部快俊、観光キヤラバン出張(十一日、福島・茨城・栃木方面)。

十一日 町景観条例検討委員会(執事長 於役場)。

町観光協会役員会(執事長)。

伊藤忠営業本部長斎藤太資氏・みちのくコカ・コーラボトリング社長谷村邦久氏来山(貫首応接)。

十二日 いわて生協理事長加藤善正氏来山(世界遺産関係 管財澄照応接)。

十三日 元町消防団第九分団長高橋久治氏叙勲祝賀会(管財部秀厚)。

十四日 弥陀会(本堂)

十五日 寺報『関山』第十号発行

シンガポール産業大臣一行十二名来山(金色院執事澄順案内)。

十七日 白山会(本堂)

十八日 故西村公朝師本葬儀。執事長出向(京都愛宕念仏寺)。

初詣警備会議(管財・総務 於西行苑)。

十九日 執事長・総務部澄円、松島へ出張（四寺廻廊現地視察 松島より平泉間）。

二十日 一山協議会（広間）

二十一日 お経を読む会（円乗院・常住院後住長生）。

前江刺市長及川勉氏叙勲祝賀会（参拝慎宥 於日ニュー江刺）。

二十二日 煤払い（マスコミ各社取材）

あいおい損害保険株式会社感謝状贈呈式（電動車椅子寄付 執事長 讃衡蔵）。

二十三日 奥福寺様より注連縄奉納（執事長 本堂）。

二十四日 文殊会（経蔵）

二十五日 NHK大河ドラマ「義経」町観光推進実行委員会（以下、Nドラ「義経」観光実委と略）総会（執事長 於役場）。

I B C専務阿部氏他来山（世界文化遺産キャンペーン番組制作についての打合せ 執事長応接）。

二十八日 恒例御供餅つき

東山町長・議長ほか来山（若水送り十二年 貫首・執事長・法務広元応接）。

二十九日 NHK仙台来山（執事長・総務仁秀応接）。

三十一日 午後三時 一山総礼

平成十六年

◇一月

一日 〇時 新年祈禱護摩供修行

（本堂）

六時 第十二回東山町〈若水送り〉着

九時半 正月祈禱護摩（本堂）

十時半 総礼

修正会 积迎供（本堂）

冬堂籠り（〓五日、結衆動 開

山堂）

二 九時半 正月祈禱護摩（本堂）

修正会 薬師供（峯薬師、讃

衡蔵）

十六時 謡初め（広間）



三 九時半 正月祈禱護摩（本堂）

修正会 山王供（山王堂）

十一時半 元三会 慈恵供

（本堂）

四 修正会 熊野供（瑠璃光院薬師堂）

讃衡蔵運営委員会（執事長・館長光中・管財澄照ほか 讃衡蔵

会議室）。

五 修正会 文殊供（経蔵）

大般若会（利生院弁財天堂）
梵焼供（結衆勤 開山堂）

六日 修正会 釈迦供・月山供
（釈迦堂）

本日より寒修行（行者五名、町内托鉢）。

七日 修正会 白山十一面供（本堂）

大般若会（本堂）

十四時 修正会 弥陀供（金色堂）

八日 修正会 薬師供（旧關伽堂薬師、讃衡蔵）一字金輪仏・千手観音法楽

修正会結願

十三時半 恒例「金盃披き」

九日 文化財防火訓練事前打合せ
（管財部秀厚 於役場）。

仙台・在家仏教協会 執事
長講話（「いのちの季節」）。

十日 天台宗ハワイ別院荒了寛師来山（貫首応接）。

十三日 新年挨拶回り（執事長 盛岡・一関）。

節分講中総会（執事長・法務 広元ほか 於泉庵庵）。

十四日 慈覚会（御影供 本堂）
金色堂諸仏拔魂法要

金色堂西北壇阿弥陀如来坐像、西南壇勢至菩薩立像、

西北壇増長天立像、および中央壇天蓋、光背台座等を

搬出（文化庁による指定事前調査のため、美術学芸課川瀬由照氏来山 管財澄照立会）

お経を読む会（貫首）
文化財防火訓練打合せ（執事長・管財部秀厚 於役場）。

十五日 平泉町観光キャラバン実行委員会（フェリー関係者来庁 総務部快俊・澄円 於役場）。

特別史跡中尊寺境内保存管理計画策定委員会（参務光中・管財澄照 於郷土館）。

十六日 江刺市佐藤様来山（貫首応接）
衣川村長来山（貫首応接）。

十九日 執事長、町内にて講話（演題「津田左右吉先生を語る」 ぶれあい歴史のさと事業「歴史教室」 於郷土館）。

二十日 中尊寺仏教文化研究所『論集』編集会議（讃衡蔵会議室）。

二十一日 平泉町景観条例検討委員会（執事長 於役場）。

二十三日 総務部快俊・澄円、松島へ出張（四寺廻廊会議 於瑞巖寺）。

二十四日 執事長、町内にて講話（町地域婦人団体協議会 於日武蔵坊）。

二十五日 文化財防火デー
二十六日 Nドラ「義経」観光実委（執事長・総務部快俊・澄円 於役場）。

中尊寺特設消防隊 消防庁
長官・文化庁長官表彰（文化財防火デー五十周年記念式典 管財澄照 於京都市内）。

町観光協会理事会（執事長）。

町観光協会理事

町観光協会理事

町観光協会理事

町観光協会理事

二十七日 菊まつり写真コンテスト審査会（広間）。

「世界文化遺産登録へ向けた庭園文化都市町づくり構想検討委員会」（執事長 於役場）。

二十八日 執事長、東京へ出張（入江正巳画伯仏教美術展 於日本橋高島屋）。

文化庁挨拶回り（執事長）。

三十日 世界文化遺産推進協議会役員会（管財澄照 於役場）。

黄金王国推進委員会総会（総務部快俊 於一関市役所）。

◇二月

一日 月次大般若（本堂）

栃木県国際交流課葉玲君氏来山（貫首広接・参務光中案内）。

二日 平泉町文化観光振興運営委員会（執事長 於役場）。

三日 恒例大節分会。（関取朝赤龍招く。歳男歳女七十三名、町内園児

が豆を撒く）。

寒修行満行

五日 執事長、東京へ出張（NHK本社訪問 毛越寺執事長・観光協会長・町長・観光課長同行）。

岩銀友の会講演会（総務部澄円 於日武藏坊）。

六日 天納久和師招き、声明研修（～七日、大広間）。

福岡県大島村中学二年（生徒十名・教員三名）来山。

八日 一関喜桜会発表会（貫首・執事長 於一関文化C）。

九日 四寺廻廊推進関係団体担当者会議（総務部澄円 於役場）。

佐川美術館顧問河田貞氏ほか来山（～十日、「国宝中尊寺展」打合せ 管財澄照）。

十三日 町観光協会役員会（執事長）。

故砂金文夫氏葬儀（執事長 於毛越寺）。

十四日 涅槃会御逮夜（本堂）

十五日 涅槃会（本堂）
大船渡町づくり塾来山（管財澄照案内）。

都市平泉CG復元事業「甦る都市平泉」試写会（広間）。

お経を読む会（瑠璃光院）
全国新聞社一行十二名来山（貫首広接 執事長案内）。

地方分権事務局長荒木慶司氏来山（貫首広接 執事長案内）。

十七日 管財澄照、東京へ出張（重文金銀装舍利壇修理状況視察 於東博修理室）

十八日 平泉芭蕉全国俳句大会実行委員会（執事長 於役場）。

天台宗務総長西郊良光師・延暦寺執行森定慈芳師来山（執事長・陸奥教区所長光中・副所長澄順・総務仁秀広接）。

平泉経済同友会新春講演会（総務仁秀 於岩間会館）。

十九日 世界文化遺産登録指導委員会
(執事長 於郷土館)。

二十日 町観光協会定時総会(執事
長ほか 於商工会館)。

二十一日 貫首、撮影取材(県外向け広
報誌「PANCU」 県広報課)。

二十二日 さとうまささはる議員活動四
十年祝賀会(参務光中 於ダイ
ヤモンドP)。

生涯学習町民のつどい(執
事長 於郷土館)。

二十三日 平泉町景観条例検討委員会
(執事長 於役場)。

二十四日 町上下水道事業運営協議会
(管財澄照 於役場)。

二十五日 泉観光協会主催「ゆったり・
ぬくもり岩手の旅」首都圏
エージェント八名来山(総
務部快俊案内)。

二十七日 貫首、町内にて講話(南岩
手観光推進協百名 於平泉レスト)。

二十九日 世界文化遺産講演会(講演

稲葉信子氏・杉本宏氏 貫首・執
事長ほか 於平泉レスト)。

◇三月
一日 月次大般若(本堂)

花まつり打合せ会(法務部章
興・澄円 於琥珀亭)。

IBC来山(鼎談について 貫
首・執事長応援)。

二日 泉観光協会主催「平成十五年
度マスコミ招待会」首都圏
マスコミ一行十二名来山
(総務案内)。

平泉東友会総会(総務部快俊
於平泉レスト)。

三日 本山より即真尊龍師来山
(法務広元応援)。

四日 職員研修(講師釈尊院 広間)。
日仏国際研究集会十二名来
山(貫首応援 管財澄照案内)。

五日 佐川美術館井上英明氏来山
(国宝中尊寺展打合せ 管財澄照)。
一関地区防災協会主催防火講習

会管財部秀厚 於一関アイドール)。

六日 職員研修(講師釈尊院 広間)。
七日 貫首、町内にて講話(演題
「わが世誰ぞ」 平泉人間ドック
簡保の会百二十名 於H武蔵坊)。

八日 町観光協会役員会(執事長)。
西行祭短歌大会打合せ(総
務仁秀ほか 於一関文化C)。

貫首、日光へ出向(十一日、
小暮師御母堂葬儀参列)。

菊まつり協賛会役員会(春
興・管財 広間)。

九日 職員研修(講師釈尊院 広間)。
二区自主防災会結成総会

十四日 陸奥教区臨時一隅理事会
(執事長 於二区公民館)。

陸奥教区布教養成所研修会
(広間)。

十五日 貫首、撮影取材(IBC鼎談
(講師円乘院 大広間)。
「平泉(世界文化遺産への道)」

増田知事・羽田澄子氏 茶室)。

十七日 総務仁秀・澄円、山形へ出張（四寺廻廊打合せ 於立石寺）。

十八日 総務部快俊、盛岡へ出張（県観光協会協議会 於H東日本）。

町観光審議会（執事長 於役場）。

賞首、インタビュー（岩手日報 シリーズ「心」 御居間）。

十九日 基衡公御月忌（胎曼供 本堂）



金色堂壇上諸仏、国宝指定
答申がなされた旨奉告。

お経を読む会（葉樹王院）

町観光協会企画宣伝・キヤ
ラパン会議（総務仁秀・快俊・
澄円 於丸荘）。

二十日 春彼岸会法要（法華三昧
澄円 於丸荘）。

春期一山会議（大広間）

二十一日 総代・世話人会総会（執事
長・法務広元ほか）。

二十二日 大池跡発掘現地説明会

二十三日 町観光協会役員会（執事長・
執事長、仙台へ出張（JR
仙台支社訪問 観光協会長同行）。

道の駅「平泉（仮称）」説明
会（総務部快俊 於商工会館）。

二十四日 開山会（護摩供 開山堂）
中尊寺仏教文化研究所『論集』
第二号発行

二十五日 執事長、盛岡へ出張（県観
光協評議会 於日ロイヤル盛岡）。

四寺廻廊予算会議（総務部澄
円 於毛越寺）。

二十六日 一関市拠点推進会議定時

総会（執事長 於世嬉の二）。

源義経公東下り行列保存会
総会（総務部快俊 於滝沢魚店）。

二十七日 金色堂内説明録音（総務部快
俊・澄円、仙台出張 於MAスタ
ジオ）。

二十九日 世界文化遺産推進基金運営
委員会（執事長 於役場）。

三十日 庭園文化都市町づくり構想
検討委員会執事長 於郷土館。
重文金銀装舍利壇、修理完
了還蔵（管財澄照立会）。

◇四月

一日 月次大般若（本堂）

二日 佐川美術館河田貞氏ほか来山
（「国宝中尊寺展」打合せ 仏文研
澄元・管財澄照）。

三日 賞首・執事長、仙台へ出向
（「国宝鑑真和上展」開会式 於仙
台市博物館）。

陸奥仏教青年会托鉢（町
内・総会（広間））。

四 日 貫首、栃木へ出向（芳賀郡常

珍寺住職葬儀。

六 日 「国宝鑑真和上展」参観

（一老・澄順・澄元・澄照・広元・

光聰仙台出向）。

七 日 めんこいテレビ後藤顧問来山

（貫首・執事長応援）。

八 日 仏生会（本堂）

仙台青葉能の会実行委員会

（執事長 於河北新報社）。

お経を読む会（観音院）

福聚教会中尊寺支部総会

（大広間）。

能申合せ（大広間）

九 日 岐阜県郡上市白鳥町へ中尊

寺ハスを株分け（管財部秀厚・

職員千葉出向）。

「国宝鑑真和上展」参観

（円融・光中・春興・康純・宏紹

仙台出向）。

中尊寺一山互助会運営委員

会（秀円・執事長・慎有・仁秀・

澄元 応援）。

十日 本坊裏門石段改修工事竣工

陸奥教区寺庭婦人会会若手支

部定例総会（執事長、陸奥教区

所長光中 於毛越寺）。

十三日 日本教育会岩手県支部長堀川

氏・事務局長及川氏来山（貫

首心接）。

十四日 陸奥教区議会・一隅理事会

（大広間）。

「国際観光人材活用事業」

プロジェクト委員会（総務

部澄円 於商工会館）。

十五日 弁慶力餅競技保存会総会

（管財部秀厚 於泉そば屋）。

十六日 菊まつり協賛会総会（執事

長・春興・管財 大広間）。

春の藤原まつり警備会議

（執事長・管財・総務 於西行苑）。

十七日 観音講（山内観音院）

十八日 故鈴木幸男氏葬儀（執事長参

列 於（ヘリーノ）H）。

十九日 Nドラ「義経」観光実委打合

せ（総務部快俊・澄円 於役場）。

二十日 金色堂西北壇阿弥陀如来坐

像、西南壇勢至菩薩立像、

西北壇増長天立像、中央壇

天蓋「特別展観新指定国

宝・重要文化財」にて公開

（五月五日 於東京国立博物館）。

一 関警察官友の会役員会

（執事長 於一関警察署）。

二十一日 貫首、京都へ出向（二十二

日、妙法院）。

県教委生涯学習文化課長渡邊淳

氏来山（執事長・管財澄照応援）。

衣関桜友会清掃奉仕・観桜

会（管財澄照・秀厚）。

二十二日 町観光協会役員会（執事長）。

町観光キャラバン実行委員

会総会・Nドラ「義経」観光

実委合同会議（執事長、総務

仁秀・快俊・澄円 於役場）。

平泉郷土館運営委員会（管

財澄照 於郷土館。

中尊寺一山互助会・一山協
議会（広間）。

二十三日

世界文化遺産推進協議会総
会（郷土館館長大矢邦宣氏講演

「中尊寺建立供養願文を読む」
執事長・管財澄照 於役場。

駅前芭蕉館落成式（貫首ほか）。
藤原まつり担当者打合せ会

（総務部快俊 於商工会館）。

二十四日

恒例花まつり

「北上川クルージング」流

域連携交流会（執事長）。

二十五日

入江正巳画伯より「中尊寺

法華説相図從地涌出品」、

「幻想中尊寺曼荼羅」奉納

（奉納式・貫首・執事長・参務光
中・法務広元・管財澄照・光臨
於毛越寺）。

二十六日

能申合せ（能舞台）

二十七日

佐川河田氏ほか来山（打合せ

執事長・管財澄照応接）。

二十八日

執事長、東京へ出張（東博
新指定展・文化庁・国土交通省訪
問）。

二十九日

西行法師追善法要（本堂）
第二十五回西行祭短歌大会

（講師 福島泰樹氏「人生の歌」

貫首賞「若かりし頃のおろかさま
さまざと見せられてをり暁の夢」
（杉山百合子 金成町）

◇五月

一日

春の藤原まつり開幕

藤原四代公追善法要、稚児

行列、常の如し。

郷土芸能奉演（市野々神楽）

二日

開山護摩供（開山堂）

福島いわき青年会議所一行

来山（貫首・執事長応接）。

東下り行列役者歓迎レセプ

ション（執事長 於H武蔵坊）。

郷土芸能奉演（胆沢町朴ノ木

沢念仏剣舞、平泉赤伏神楽）

三日

源義経公東下り行列（義経

公役・俳優石垣佑磨）

郷土芸能奉演（川西念佛剣舞）

四日

古実式三番

神事能「竹生鳥」

郷土芸能（胆沢町行山流都鳥鹿

踊、一関市市野々小学校鶏舞）

五日

古実式三番

神事能「鞍馬天狗」

子方 佐々木恭亮

稚児衆

千葉晃・菅野靖純・菅野裕

康・佐々木亮・千葉遼

狂言「清水」

郷土芸能奉演（江刺市行山流

角懸鹿踊、達谷窟毘沙門神楽）

六日

山王講（山王堂）

八日

平泉文化財愛護少年団研修

（山内清掃ほか 宏紹 かんさん亭）。

九日

執事長、法話（淡交会二十名

本堂）。

即真尊龍師来山「聖なる空間」

声明公演習礼 本堂）。

十日 総務仁秀・澄円、松島へ出張（四寺廻廊事務局連絡会 於松島中央公民館）。

郡市仏教会総会（法務部章興

於あついで）。

十二日 東京芸大有賀祥隆氏来山（貫首・執事長・管財澄照応接）。

土門拳記念館石本保利事務局

長来山（執事長応接）。

十三日 讚衡藏運営委員会（執事長・館長光中・金色院執事澄順・仏文研澄元・仏文研成寛・管財澄照・管財部光聴・役席澄巴）。

貫首インタビュー（岩手日報）。

執事長・管財澄照、仙台出張（佐川「国宝中尊寺展」打合せ

於H・JAL仙倉）。

総務部澄円、仙台へ出張（四

寺廻廊法要参列願持参 於JR仙

台支社）。

十六日 「いわて文化財」二百号記念祝賀会（管財澄照 於盛岡ク

ランドH）。

お経を読む会（利生院後住宏

等五点還藏（文化庁美術学芸課

川瀬氏来山、管財光聴立会）

十八日 金色堂諸仏開眼法要

瑞巖寺笹山氏ほか写経の会

十一名来山（執事長応接・総務部澄円案内）。

IBC岩手放送専務阿部氏ほか

来山（総務応接）。

執事長、東京出張（東京大学

人類科学植田信太郎教授と面談）。

老分会議（老分会）。

平泉菊花会総会（管財部秀厚

於泉そば屋）。

二十一日 平泉商工会通常総会（執事

長 於商工会館）。

二十二日 讚衡藏第三回館藏品展「平

山画伯 中尊寺を描く」開催（六月三十日）。

中尊寺杯ゲートボール大会

（執事長 於長島砂子沢）。

米沢道澄師・明光寺護持会

婦人部四名来山（貫首挨拶）。

貫首、盛岡にて講演（日本

教育会県支部総会 於フラザおで

つて）。

二十三日 足利市龍泉寺源田師ほか五名

来山（貫首 茶室）。

二十五日 貫首、法話（塩釜市民生委員

本堂）。

二十六日 貫首、盛岡へ出張（岩山漆芸

美術館開館除幕式）。

一 関警察官友の会総会（執

事長 於ペリーノH）。

平泉商工会青年部通常総会

（総務部快俊 於商工会館）。

二十八日 岩手日報主催記者クラブ十五

名来山（執事長案内）。

貫首、栃木県にて講演（栃

木県博物館協会 於栃木県博）。

平泉町景観条例策定報告会

(執事長 於役場)。

国道四号線衣川橋梁改築に
関する意見交換会 (執事長
於二区公民館)。

三十日 陸奥教区布教師会総会・研
修会 (所長光中ほか 於毛越寺)。

三十一日 文化庁長官河合隼雄氏講演、
貫首と対談 (平泉文化会議所
「セミナー東方」 於平泉少)。

◇六月

一日 月次大般若 (本堂)

河合隼雄氏来山 (貫首応接
執事長案内)。

二日 執事長、法話 (JTBトラベ
ランド渋谷ツア―四十名/在家仏
教協会協力 本堂)。

岩手河川国道事務所糠沢氏・一
戸氏来山 (講演打合せ 貫首
応接)。

三日 平泉芭蕉祭全国俳句大会打
合せ (執事長 於役場)。

四日 伝教会 (御影供 本堂)

平泉をきれいにする会総会
(管財部秀厚 於役場)。

五日 貫首、東京へ出向 (浅草寺執
事長小岩井貫承師本葬儀 於伝法
院)。

六日 徳島銀行会長岸一郎氏・頭取
柿内慎一氏来山 (貫首 茶室)。

長滝神社若宮宮司一行来山
(管財澄照案内)。

執事長、東京へ出張 (第十
二回ふるさと平泉会総会 於池之
端文化C)。

総務部快俊、北海道へ出張
(十二日、修学旅行誘客観光キ
ャラパン 於札幌・小樽各中学校)。

九日 貫首、法話 (埼玉教区檀信徒会
二十四名 本堂)。

宗務慎有・広元、東京へ出
張 (天台宗災害補償制度推進会議)。

貫首、一関にて講話 (実践
水文システム研究会 於一関あい
ぽーと)。

十一日 執事長、東京へ出向 (大正
大学講義)。

浅草寺執事守山雄順・田中昭
成師来山 (貫首応接)。

実践水文システム研究会一
行来山 (貫首応接)。

十二日 通訳ガイド研修 (執事長)。

十三日 法華経一日頓写経会 (本堂)
執事長・参務秀圓・総務部澄
円、松島へ出張 (四寺廻廊一
周年記念慈覚大師報恩法要 於瑞
巖寺)。

即真尊龍師来山 (聖なる空間)
声明公演習礼 本堂)。

十六日 貫首、法話 (西磐井郡市仏教会
「ウエサカ式典」 於赤荻要津院)。

盛岡ユネスコ協会高橋千賀子
氏・日本ユネスコ連盟荒井千
香子氏ほか来山 (貫首応接)。

十七日 Nドラ「義経」観光美委企画
検討会 (総務部澄円 於郷土館)。
十八日 執事長、東京へ出向 (大正

大学講義。

貫首、栃木へ出向（対談 於
とちぎ国際交流C）。

十九日 執事長、気仙沼にて講演

一関市消防団長大森忠雄氏叙
勲祝賀会（管財澄照 於ペリ
ノH）。

二十日 自在房蓮光忌法要（本堂）

栃木コンソーレセ・ミナー
一行二十名来山（貫首 本堂）。

二十一日 茨城円満寺様団参（本堂）。

管財澄照、守山市出張（「国
宝中尊寺展」打合せ 於佐川美）。

盛岡漆芸美術館全籠福氏よ
り「螺鈿般若心経」奉納。

市町村合併に関する各種団
体との懇談会（執事長 於役場）。

一関市教育委員会、米国小
中学校教員一行二十名来山

（管財部光聴案内）。

二十三日 NHKエンタープライズ「日本

の風景百選」撮影（朝勤行

貫首導師）。

世界遺産推進協幹事会（管
財澄照 於役場）。

二十四日 テレビ朝日「百寺巡礼」撮影、

五木寛之氏来山（二十六月）。

法務広元、本山へ出張（中央
法儀音律研修会 於宗務庁）。

二十五日 奥州街道跡現地説明会（於高館

麓）。



管財部秀厚、広島・山口方
面へ出張（二十七日、第五分

団消防施設研修旅行）。

二十六日 瀬戸内寂聴師来山（秘書・天
台寺執事長ほか。貫首・執事長応
接）。

二十七日 貫首、一関にて講話（岩手
県医師会総会 於ダイヤP）。

「聖なる空間」声明公演習
礼（本堂）。

二十九日 第四十三回平泉芭蕉祭全国俳

句大会（大広間）

三十日 県観協教育旅行誘致宣伝部

会総会（総務部快俊 於盛岡H
ニューカーリナ）。

◇七月

一日 月次大般若（本堂）

二日 水かけ御輿警備会議（管財
部秀厚 於商工会館）。

三日 NHK仙台「ハイビジョンふ
るさと発スベシヤル」撮影
（五日、金色堂他）。

世界遺産塾講座来山（管財

澄照案内）。

- 執事長、町内にて講話（第八回いわて女性洋上セミナー研修交流会「平泉文化と女性」於国民宿舍平泉荘。
- 四日 東京芸大戸津圭之介氏来山（参務光中案内）。
寺藏の平山郁夫画伯作品を佐川美術館へ貸出（管財澄照・光聴立念）。
- 六日 職員研修旅行（九日、韓国第一班 秀圓・仁秀・澄元・章興同行）。
NHK番組制作局加藤善正氏来山（プロジェクトX）制作について 執事長応接。
- 七日 管財澄照、盛岡へ出向（県教委文化財保護監小田野哲憲氏葬儀於盛岡南部会館）。
- 九日 町観光協会役員会（執事長）。
東文研三浦定俊氏来山（金色堂保存環境調査 管財澄照）。
- 十日 山内大徳院法事（本堂）

- 十一日 如法經十種供養会（頓写法華經奉納式）。
- 十二日 管財部秀厚、二本松へ出張（菊まつり菊苗搬入 春興同行）。
- 十三日 職員研修旅行（十六日、韓国 第二班 執事長・澄順・快俊・光聴同行）。
- 十五日 福岡県宗像地区市町村長協議会行政視察一行来山（管財澄照案内）。
ザ・ベスト・オブ能・狂言二〇〇四（貫首 随行宏紹 於盛岡市民文化ホール）。
- 十七日 清衡公御月忌（胎曼供 本堂）
札幌市定山溪中学教員六名来山（総務部快俊案内）。
NHK盛岡「ハイビジョンふるさと発スペシャル」撮影（御月忌 管財）。
- 十八日 平泉総社神輿渡御
NHK「プロジェクトX」撮影（十九日、管財澄照・光聴

- 立念、境内・金色堂）。
- 「聖なる空間」声明公演習礼（本堂）
- 二十日 テレビ岩手、貫首鼎談収録（川勝平太氏・高橋克彦氏 本堂）。
- 二十一日 貫首・執事長、京都へ出張（二十二日、五山会 於京都宝ヶ池プリンスH）。
- 二十二日 泉江三様一行六名来山（関西県人会 参務光中案内）。
貫首、法話（昭和三十一年警察同期会三十名 本堂）。
- 執事長、東京へ出張（映画「山中常磐」試写会、演出羽田澄子氏 於映画美学校）。
- 二十三日 長島時子氏来山（中尊寺ハス開花状況視察 管財澄照・秀厚）。
- 二十五日 貫首、北上市和賀の里にて講演（中尊寺ハス鑑賞会 執事長・参務光中 於岩沢公民館）。
- 即真尊龍師来山（聖なる空間）声明公演習礼 本堂）。

二十六日 庫裡広間畳替え(八月一日)。

岩手銀行会社説明会(総務部澄円 於ペリーノH)。

NHK「プロジェクトX」

撮影(二十七日、管財澄照立会金色堂)。

二十八日 Nドラ「義経」観光実委(執事長・総務部快俊・澄円 於役場)。

大文字まつり警備会議(管財澄照・秀厚 於西行苑)。

二十九日 貯水槽清掃(管財部)。

三十日 貫首、講話(「世界遺産の精神性」 気仙沼・本吉地方文化財保護委連絡協 本堂)。

法務広元・総務部澄円、仙台

へ出張(四寺廻廊会議 於電通東日本)。

◇八月

一日 月次大般若(本堂)

リクリエーション客動態調査(町観光商工課 本堂前ほか)。

前町消防団長菅原和郎氏叙勲

祝賀会管財澄照於平泉レスト)。

二日 日光市役所一行来山(貫首 応援)。

薪能打合せ会(執事長・管財澄照ほか、於駅前芭蕉館)。

三日 坂本中江様ほか大津市議会一行来山(靱南師紹介 貫首挨拶 金色院執事澄順案内)。

一閑遊水地事業に伴う国道四号線衣川橋梁改築に関する計画説明会(執事長 於二区公民館)。

四日 十五時半、**平和の鐘**打鐘。日光市議員運営委員会九名来山(貫首案内)。

元奈文研所長鈴木嘉吉氏来山(貫首挨拶・管財澄照応対)。

五日 大文字まつり担当者打合せ会(法務部章典 於八つ花)。

六日 陸奥教区所長光中ほか、函館へ出向(七日、宗務打合せ)。

七日 夏安居(堂籠り 十一日、結

衆動 開山堂)

八日 八重樫貞子氏来山(宮城県学校茶道連絡協議会打合せ)。

十日 梵焼供(結果衆動 常の如し)平泉をきれいにする会「ゴミ持ち帰り運動」実施(管財部秀厚 於平泉前沢IC)。

十一日 県庁畠山氏来山(北東北三県・北海道知事サミット打合せ 総務 仁秀 応援)。

十四日 第二十八回**中尊寺新能**半能「須磨源氏」(佐々木宗生師)

狂言「簸屑」(野村万作師)能「夜討曾我」(佐々木多門師)

薪奉行 一力雅彦氏・澤田博司氏・鈴木文彦氏・宇部貞宏氏

十五日 町成人式(法務広元 於郷土館)文化財愛護少年団研修(坐禅・募金活動 宏紹)。

十六日 第四十回平泉大文字まつり

遠藤梧逸句碑再建

「清衡の願文の意の大文字」

先祖代々追善法要（町内寺院

於北上川館裏河川敷。

十八日 執事長、盛岡へ出張（観光

企画宣伝をJA県中央会で協議。

十九日 Nドラ「義経」観光実委打合

せ（総務部快俊・澄円 於役場）。

管財澄照、町内で講話（ふれ

あい歴史のさと事業 於郷土館。

二十日 毛越寺施餓鬼会（金色院執事

澄順参席）

執事長、盛岡にて講演（岩

手県広華会連合会「平泉の文化道

産」Hメトロ盛岡）。

貫首、本山へ出向（戸津説法

随喜）。

東北地区学校茶道連絡協議

会研修会一行四十五名来山

（茶室・広間）。

二十二日 讚衡蔵運営委員会（執事長・

館長光中・管財澄照他）。

二十三日 栃木教区円宗寺檀信徒黒子徹様

一行七十名来山（貫首挨拶）。

大施餓鬼会御逮夜（本堂）

二十四日 大施餓鬼会・放生会（本堂）

二十五日 外国語ボランティアガイド

委員会（総務部澄円 H武蔵坊）。

二十六日 本山夏安居（二十九日、光聴・

章興 登観）。

貫首、法話（第五十三回天台保

育連盟全国大会 大広間）。

町上下水道事業運営協議会

（管財澄照 於役場）。

佐川美術館事務局長稲熊氏来山

（「中尊寺展」打合せ 管財澄照）。

二十七日 即真尊龍師来山（聖なる空間「

声明公演習礼 本堂）。

二十八日 韓国文化部長官・李御寧氏

来山（貫首挨拶 執事長案内）。

秋田県湯沢市了翁禪師研究会田口

大師様一行十四名来山（総

務部快俊案内）。

二十九日 貫首、花巻へ出張（岩手に

世界遺産を！ シンポジウムパ

ネラー 貫首・増田知事・東大教

授五味氏 於花巻市文化会館）。

三十日 平泉町シルバー観光ガイド

講習会（執事長 於商工会館）。

三十一日 龍玉寺施餓鬼会（参務光中参席

◇九月

一日 月次大般若（本堂）

法務広元、瀬見温泉へ出張

（亀割観音例祭）。

二日 総務部快俊・章興、札幌へ

出張（修学旅行誘致説明会）。

即真尊龍師来山（聖なる空間「

声明公演習礼 本堂）。

三日 泰衡公御月忌（金曼供 本堂）

東和町「とうわ町民塾」三

十五名来山（御月忌随喜 法要

後法話と案内 執事長）。

四日 「聖なる空間」声明公演り

ハーサル（一関文化C）。

五日 「聖なる空間」声明公演

（一関文化C）。

大阪学院大宮本圭造氏・神戸女子大大谷節子氏来山（古面調査 管財澄照立案）。

六日 県指定法泉院小前沢坊庫裡茅屋根修理着工。

Nドラマ「義経」観光実委（総務部快俊・澄円 役場）。

七日 総務部澄円、長野へ出張（十日、町観光キャラバン）。

八日 金色堂模型搬出（十日、東京NHK「プロジェクトX」スタジオ収録 管財澄照同行）。



十日 執事長・管財部秀厚、北上

市へ出張（和賀岩沢公民館扁額寄贈 於市役所）。

十一日 元社民党衆院議員故沢藤礼次郎氏「お別れの会」（管財澄照参列 於Hシティープラザ北上）。

管財澄照、紫波町へ出張（五郎沼薬師神社例大祭）。

十二日 貫首、一関にて講話（一関中央ロータリークラブ創立十周年記念式典 於ダイヤモンドP）。

貫首、江刺へ出向（Nドラマ「義経」ロケ開始記念シンポジウム 於江刺文化会館）。

十三日 県教育長佐藤勝氏来山（貫首応接 管財澄照案内）。

十四日 陸奥教区法要習礼（慎有・広元・快俊 於仙台満願寺）。

大規模遺跡連絡協議会一行来山（貫首応接 管財澄照案内）。

十五日 仙台市博物館特別展「日・月・星」に国宝紺紙金字一

切経二巻を貸出（酒井昌一郎氏来山 管財澄照立案）。

十六日 佐川美術館「国宝中尊寺展」

に国宝金色堂壇上諸仏はじめて二十七件、七十点の宝物を貸出搬出（十九日、河田氏・井上氏ほか来山、管財澄照・光聴立念）。

十七日 白符忌（本堂）

貫首、早朝江刺へ出向

（第十二回藤原経清公御命日祭餅田史跡保存会 於岩谷堂五位塚墳丘群墓所）。

日本テレビ放送網全国部長会二十六名来山（白符忌参列）。

金色堂・讃衡蔵諸仏抜魂法要（「国宝中尊寺展」出陳のため貫首・老分）。

十八日 郷土館館長大矢氏・NHKプロ

モーション小野透氏・展博プロデューサー田中明美氏ほか来

山（「義経」関連展覧会の件 執

事長応接。

十九日 赤堂稲荷例祭（護摩供）

町敬老会（総務仁秀 於平中体
育館）。

二十日 栃木保育園本橋孝道様一行来
山（貫首応接）。

二十一日 NHK「プロジェクトX」
で「中尊寺金色堂大修理」
平安の謎に挑む」放映。

二十三日 秋彼岸会法要（本堂）

お経を読む会（地藏院後住秀
厚）

総代・世話人説明会（執事
長・総務・法務）。

二十六日 陸奥教区法要習礼（所長光
中・広元・快俊 於加美町西光寺）。

二十七日 貫首、京都へ出向（二十八
日、三千院別請暨義 於三千院）。

岩手日報事業局第一部長湯田保
道氏・岩手放送事業部長越田
敬純氏来山（執事長・総務仁秀
応接）。

二十八日 第七回仙台青葉能反省会（執
事長 於河北新報社）。

二十九日 総務部澄丹・光聰、町観光
キャラバン出張（十月一日、
九州・広島・岡山方面）。

三十日 スイス経済省国際経済担当
大使来山（貫首案内）。

庭園文化都市町づくり構想
検討委員会（執事長 於役場）。

執事長、一関にて講話（二
関地区交通安全母の会連合会三十
五周年記念「なにが安全か——」
於ダイヤモンドP）。

赤堂稲荷例祭反省会。

◇十月

一日 月次大般若（本堂）

貫首、一関にて講話（一関
信用金庫総代会 於ペリーノH）。

二日 慈眼会（本堂）

貫首、白石市にて講演（東
北ブロックユニスコ大会）。

陸奥教区法要（教区所長光中・
慎有・広元・快俊出仕。執事長法
話。於加美町西光寺）。

三日 文化財愛護の集い「平泉文
化体験ツアー」（県文化財愛護
協会主催 管財部光聰案内）。

積善院後住律秀君婚儀（本
堂）。

四日 菊まつり協賛会役員会・実
行委員会（執事長・管財 広問）。

五日 世界文化遺産推進基金運営
委員会（執事長 於役場）。

総務部快俊・秀厚、東京へ
出張（ゆったり・ぬくもり岩手の
旅・県修学旅行誘致説明会 Hエ
ドモンド）。

六日 町観光協会役員会（執事長）。

貫首、法話（IBC岩手放送三
十名 本堂）。

七日 貫首・執事長・光中・秀
圓・澄順・広元・康純・澄
照・随行宏紹、守山市へ出
張。

張。

めんこいエンタープライズ取締役
田山裕明氏来山（総務仁秀・
快俊 応接）。

埼玉教区勝福寺様一行十九
名来山（総務部澄円案内）。

八日 「国宝中尊寺展」開眼法要

（於佐川美術館）。

九日 「国宝中尊寺展」開幕（
十一月二十八日）。

十一日 執事長、三重へ出張（第十
七回「奥の細道」伊賀上野サミッ
ト 於伊賀上野フレックスH）。

十三日 貫首、かんざん亭にて法話
（盛岡遠山様三十名）。

十四日 県観光協会ゆつたり・ぬくも
り岩手の旅企画担当者十五
名来山（総務部澄円案内）。

県国際交流協会JACCAタイ
青年訪問団二十二名来山
（宏紹案内）。

貫首、法話（福岡部十名 本堂）。

十六日 貫首、法話（いわきん関連グループ

本社長会六十名 本堂）。

ケアセンター「いこい」開設
記念式典（貫首・参務秀圓 於
H武蔵坊）。

十七日 お経を読む会（大長寿院後住
光聰）

十八日 能申合せ（大広間）

十九日 岩手県議会議員OB会一行
来山（執事長挨拶 本堂）。

白虎堂祭礼（山内薬樹王院）。

二十日 菊まつり開幕法要

孝道教団統理・副統理一行
二十一名来山（貫首案内）。

二十一日 鶴来町観光協会一行十七名
来山（貫首挨拶・仏文研澄元案内）。

Nドラ「義経」観光実委（執事
長・総務部快俊・澄円 於役場）。

二十二日 執事長、法話（芭蕉・奥の細
道探訪二十八名 本堂）。

二十三日 天台宗全国一斉托鉢（
十四日、一山より教区所長光中ほか
六名出向 於青森尾上町明光寺）。

貫首、江田廣典師葬儀参列

（於埼玉県長徳寺）。

二十四日 北上川リバーカルチャーA主催

「エジプト文明から学ぶ川
の文化」フォーラム（執事
長 於ペリーノH）。

二十五日 長野県津金寺様一行二十二
名来山（執事長案内）。

千葉県南総教区第三部光明寺様
一行五十五名来山（宏紹案内）。

二十六日 松喰い虫被害調査（
日、役場農林課・管財部秀厚）。

町食生活改善推進協議会一
行三十名来山（県知事夫人
貫首挨拶）。

いっくら国際文化交流会一
行十五名来山（貫首案内）。

二十七日 能申合せ（能舞台）

二十八日 秀衡公御月忌

一山協議会（広間）

二十九日 世界文化遺産登録指導委員
会（執事長 於役場）。

三十日 貫首、日光にて講話（日光

保護区保護司会五十五周年・日光市
更生保護女性会四十周年記念大会）。

狂言の会（慎有・光聰・澄円
於一関文化C）。

三十二日 貫首、町地域婦人団体協議

会創立五十周年記念式典講演

（「いのちの源 こころの根」 於
平小体育館）。

◇十一月

一日 秋の藤原まつり開幕

藤原四代公追善法要、稚児
行列、常の如し。

郷土芸能奉演（胆沢町柳田念
佛劍舞）

二日 菊供養会（本堂）

三日 狂言「附子」

中尊寺能「枕慈童」（能舞台）

郷土芸能奉演（胆沢町行山流

都鳥鹿踊、衣川村川西大念佛劍舞）

四日 大正大学史学科黒川高明教授

と大学院生十三名来山研修

五日 （執事長・管財澄照対応）。

北上川・柳の御所遺跡保存
に伴う河道代替完了記念式
典（貫首・執事長 於高館柳の御
所側）。

貫首、守山市へ出張。

管財部光聰、守山市へ出張

（十三日、「国宝中尊寺展」駐在

説明 於佐川美術館）。

六日 貫首、佐川美術館で記念講

演。

七日 石徹白虚空蔵菩薩抜魂法要

（貫首・光聰・澄円 於佐川美術館）。

九日 JR東北本線橋梁改築後の

景観意見交換会（執事長・管財

澄照 於二区公民館）。

十日 如法写経十種供養会（本堂）

十二日 京都ふるさとの集い連合会主催

「みちのくの旅・岩手を訪

ねて」一行三十五名来山

（管財澄照案内）。

奈文研埋文センター古環境研究室

長光谷拓実氏来山（中尊寺所

蔵文化財の年輪年代調査打合せ
管財澄照・光聰対応）。

十四日 執事長、町内にて講演（外
から見た平泉「西磐井郡老人クラ

ブ連合会リーダー研修会 於郷土
館）。

菊まつり表彰式（今年より文

部科学大臣奨励賞設定）

十五日 瑞巖寺職員研修旅行第一班

十一名来山（貫首応接・総務部
澄円案内）。

執事長、講話（建設団体婦人

部二十名 広間）。

十六日 古都ひらいずみガイドの

会・実技研修会（執事長 於

弁慶の墓）。

十八日 貫首、滋賀へ出張（十九日、
町民号に合流 佐川美術館）。

瑞巖寺職員研修旅行第二班

十五名来山（康純案内）。

兵庫天台仏教青年会十三名

来山（宏紹案内）。



前貫首多田厚隆師十三回忌
法要（執事長・光中・澄元・神奈
川へ出向 於横浜市大聖院）。

二十二日 法務部章典、守山市へ出張
（三十日、「国宝中尊寺展」駐在
説明）。

町内教職員四十名来山（町
教員研修会 管財澄照案内）。

二十三日 天台会御逮夜（結果動 本堂）。
二十四日 天台会厳修（御影供 本堂）。

文化庁記念物課長村田善則氏

来山（執事長案内）。

二十六日 総務部快俊、仙台へ出張（N
ドラ「義経」プロジェクト推進実
行委員会仙台駅観光キャンペーン
及び関係機関訪問）。

総務部快俊、花巻へ出張（花
巻・遠野・平泉観光研修会 於花
巻千秋閣）。

二十七日 町消防交友会総会（管財澄照
於平泉レスト）。

二十八日 県広告業協会主催バスツアー
百五十名来山（総務仁秀挨拶）。
一隅を照らす運動岩手地区
大会（船村徹氏講演「歌は心でう
たうもの」・貫首対談「歌供養のこ
ころ」 於平小体育館）。

参拝慎宥・管財部秀厚、守山
市へ出張（三十日、「国宝中
尊寺展」抜魂法要於佐川美術館）。

喜多流職分会十一月自主公
演能（佐々木宗生師「三井寺」披
演 執事長 於喜多能楽堂）。

演能（佐々木宗生師「三井寺」披
演 執事長 於喜多能楽堂）。

二十九日 「国宝中尊寺展」抜魂法要
（慎宥秀厚章典 於佐川美術館）。

執事長、気仙沼へ出張（第
二回広域歴史文化シンポジウム
於日観洋）。

三十日 県指定法泉院小前沢坊庫裡
茅屋根修理工事完了。

金色堂中国語説明アナウン
ス収録（総務部澄円 於盛岡G
Mファクトリースタジオ）。

東北建設協会総務部長大沼氏来
山（貫首講演打合せ 貫首・総務
応接）。

遠藤梧逸「大文字」句碑を再建

既存の大文字句碑は、昭和四十年に建てられたものでしたが石肌が荒れ、梧逸先生の門人からも見るに忍びないとのこと指摘もいただきました。平泉観光協会・束稲吟社・平泉文化会議所と協議して再建を発起。幸い、束稲山の裾より恰好の石が得られ、梧逸先生の筆跡を写刻する段取りを進めつつ工事費を捻出すべく勸募させていただきました。

(邦世)

記

新句碑 高さ150 cm 幅80 cm
 (旧碑) 高さ133 cm 幅75 cm
 工費 四十八万七千円(石謝礼・税込み)
 施工者 平泉・葛西石材店

〔寄付者御芳名〕

原田 青児様 (東京)	十万円
西村 専次様 (東京)	五万円
関口 一雄様	三万円
鈴木 男様	一万円
菅原 健様	一万円
南館廣太郎様	一万円
千葉 秋夫様 (前沢生母俳句会長)	一万円
三浦 辰郎様 (同 古城俳句会長)	一万円
白山俳句会有志	一万円
前沢俳句会有志	四万六千円
平泉束稲吟社有志	五万一千円
平泉町観光協会	二万円
平泉文化会議所	三万円
中尊寺	五万円
匿名	五万円
計	四十八万七千円也

建立 平成十六年八月十六日

御奉納者 御芳名

平成十五年十一月～平成十六年十一月

一、螺鈿般若心經

盛岡市 全 龍福様

一、大提灯 (二尺五寸一對、一尺三寸高張り四対)

一関市 精茶百年本舗様

一、法要参列者用椅子 (本堂備・三十脚) および収納庫

中尊寺檀信徒一同様

一、御供用餅米 五斗

衣川村 千葉卓治様

奉納

平成十六年四月二十五日

日本画 (八五・六×九三・〇cm)

「中尊寺法華説相図從地涌出品」

平成十四年十一月十二日

日本画 (六三・〇×九一・〇cm)

「幻想中尊寺曼荼羅」

入江正巳様

▽なお、入江正巳様には平成十六年十一月二十四日御逝去された。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

浄財御奉納者 御芳名

平成十五年十一月十一日～平成十六年十一月三十日

天台保育連盟様

十万円

船橋市 湯澤牧夫様

三万円

(有)平泉観光写真社様

五十万円

(株)小岩金網様

五万円

天台宗開宗千二百年慶讃大法会事務局様

五万円

中林春夫様

四万円

白山文化博物館様

五万円

岩手県婦人消防連絡協議会様

五万円

立正佼成会 花巻教会様

三万円

瑞巖寺様

三万円

及川純子様

三万円

日本教育会岩手県支部様

三万円

石巻市民生委員児童委員協議会様

五万円

(社)在家仏教協会様

三万円

北日本銀行様

三万円

天台宗埼玉教区檀信徒会様

五万円

浄土宗 岩手支部様

五万円

浅草寺様

五万円

瑞巖寺様

四万円

大光普照寺様

三万円

大聖院様

二十二万円

天台寺様

十万円

岩手医科大学医学部麻醉学教室同門会様

五万円

岩手県警察学校初任科第19期生 青雲会様

三万円

気仙沼本吉地方文化財保護委員連絡協議会様

十万円

天台保育連盟様

二十万円

鞍馬寺様

五万円

能代市 上村松吾様

三万円

DCグループ社長会様

三万円

絆岩手県文化財愛護協会様

三万円

埼玉県 勝福寺様

三万円

栃小岩金網様

五万円

孝道山 宝蔵大黒天讃仰会様

五万円

冷水山清浄土院長徳寺様

八万円

千葉県 光明寺様

三万円

海部俊樹様

三万円

不動尊篤信御奉納者 御芳名

平成十五年十一月～平成十六年十一月

北海道
富良野市

南砂利工業様

三万五千元

野村隆様

季毎御供物

北海道
小樽市

村口初男様

季毎御供物

北海道
江別市

松本昇様

三万円

青森県
黒石市

北山肇様

三万五千元

青森県
南部町

工藤銀四郎様

季毎御供物

青森県
平賀町

笠原山 不動院代表
小笠原喜世様

七十六万三千元
御供物・献酒

秋田県
秋田市

木村英夫様

三万三千元

秋田県
男鹿市

大淵陽子様

三万八千元

秋田県
八森町

ベル美容室 高橋紀美世様

季毎御供物

秋田県 比内町	根本千年様	三万円	宮城県 田尻町	櫻井ひろみ様	三万円
久慈市	中塚ミヤ様	四万七千円	宮城県 富谷町	小山利男様	四万円
二戸市	米沢励様	季毎御供物	宮城県 丸森町	樋口光裕様	四万円
滝沢村	齋藤實、ソコ様	四万九千円	宮城県 仙台市	中越テック株式会社東北支社様	十五万円
花巻市	伊藤敏博様	四万円		志賀茂伸様	三万五千元
前沢町	(有)千田組 代表 千田武志様	三万円		全日法規株式会社仙台支店様	三万円
藤沢町	八沢中学校昭和三十三年卒業生 還暦同級会様	十四万一千円	福島県 福島市	沼田とも子様	御供米
平泉町	平泉中学校第十三回卒業生 同級会様	十一万八千円	福島県 いわき市	小島ヒデ子様	季毎御供物
	(有)ケーテック 平泉工事事務所 代表 芦萱敬一様	七万二千元	福島県 郡山市	笹山まり子、加茂喜代子様	三万円
	(有)千葉製材所様	三万円	福島県 新潟市	中越テック株式会社建材事業部様	二十万円
	一関信用金庫平泉支店様	三万円	新潟県 新潟市	(有)スタンドサービス 代表 吉田幹夫様	四万円
	石川巖覚様	御供米	埼玉県 埼玉市	松原クリーニング様	季毎御供物・献酒
一関市	川嶋印刷株式会社様	十万円		北山英一様	四万五千元
	(株)精茶百年本舗様	三万円		小川春吉様	三万円
	山平様	三万円		宇井彩翔、陽子様	十万円
	(有)豊隆軌道 千葉幸八様	九万五千元	東京都 新宿区	中越テック (株)代表取締役社長 岩川照様	三万円
宮城県 金成町	(株)金成工務店様	三万円	神奈川県 藤沢市	矢鋪雅子様	三万五千元
宮城県 古川市	岸久幸様	三万五千元	大阪府 和泉市	辻林正博様	七万円
宮城県 志津川町	山口昇様	三万円	広島県 広島市	昭栄建材株式会社様	三万円